



帰化人・在日外国人 にとっての 外国人問題

日本よ今...

闘論！倒論！討論！

#920

日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第920回
帰化人・在日外国人にとっての外国人問題

R7/7/31

パネリスト：

イリハム・マハムティ（ウイグル文化センター理事長）

オルホノド・ダイチン（南モンゴルクルルタイ常任副会長）※リモート出演

グリスタン・エズズ（日本ウイグル協会会員・新党くにもり神奈川代表）

ジェyson・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）

石平（参議院議員）

盧エリカ（台湾独立建国聯盟日本本部）

ロバート・D・エルドリッチ（エルドリッチ研究所代表）※リモート出演）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「鬪論！倒論！討論！2025第920回目の討論となります。『帰化人・在日外国人にとっての外国人問題』ということで、今日は帰化している方もいらっしゃるんですけど、元は外国の方と今も外国人の方を含めて、元々日本人の方を除いて、外からの目線で冷静に見られる方、そして、そういう日本の国内問題を冷静に色々考えられる皆さんに、ご出演をお願いしまして、今日は日本の外国人問題というものを中心に話し合ってみたいと思います。

もう一つ、冒頭に言っておきますと、色んな筋から言いますと、実は台湾と尖閣の問題が切羽詰まって来ていると。8月には北戴河会議という中国の長老や幹部が別荘地に集まって、そこで人事や中国共産党のこれからの方向性を決める会議があります。ここで、今、間違いなく中国の中央軍事委員会で権力闘争が起こっている。習近平の側近の軍人委員、副主席とか、そういう人達が更迭されたり消えたり色んなことになっている。

今、ナンバー2の副主席と習近平との対立、もっと言うと人民解放軍の中で習近平の力が衰えているんじゃないかということも言われています。そういう中で北戴河会議が行われて、まあ、暗殺されたとも言われていた李国強とか胡錦濤もそうですけど、こういう人達が居た共青、共産主義青年団のグループと今の習近平の政権派との対立が今、深刻になっているんじゃないかと言われています。

そういう中で、実は、日本の尖閣問題、或いは八重山諸島、与那国、石垣、宮古といった所の占領まで含めて、台湾も戦闘、上陸はしないけれども、完全な海上封鎖をして、台湾をギブアップさせる。石油や天然ガス、そして食糧は一か月半で台湾が本当に止まってしまふんじゃないかと言われています。

そういう中でアメリカの太平洋第7艦隊がハワイからこっちへ、グアムからこっちへ来られません。中共ミサイルが待っていますから、もう、そういう状態で、皆さんは、どういうイメージを持っているか判りませんが、アメリカは日本にも台湾にも直接的な来援には来られない。

そして韓国や日本の本土にある基地に居た海兵隊は殆どハワイ、または西海岸に引き揚げている。こういう状態になって、その都度、来るからねえっていう状態になっています。武器は残っていますが、そういった本当の意味での戦闘部隊は韓国にも日本にも、もう居ません。我々の分析によれば、こういうような状態のところを突いて、ウクライナは間もなく終わります。完全なウクライナ、ゼレンスキー政権は、まあ、滅びるといふのかな。

もう一つは今、イスラエルの中でイギリス、フランス、スペイン、ドイツ、こういう人達がネタニヤフ政権に対して、あのような6万人を超える虐殺、子供や女性を殺していくことは殆どジェノサイドであり、私は今日、自分の番組で言ったけど、ユダヤの人、貴方達はホロコーストを言っているけども、同じことをパレスチナ人にやっているじゃないかと。言う資格が無くなるぞということまで、ちょっと言いました。ダブらせることが中々難しいかも分からないけれども、実際、パレスチナ人は6万人も殺されている。

そしてイスラエルの閣僚が、ついにガザ地区の領有、併合を言い出したということです

ね。こういうことまであって、耐えて来たアメリカやイギリスが文句を言い出したっていうのは、ネタニヤフ政権にやるだけやらせて、ネタニヤフ政権の終わりを告げさせようとし始めているんじゃないかと。

そして次に来るのは、今言ったように台湾問題、尖閣問題を中心とした東アジアの中で、戦争が起きる。ウクライナ、パレスチナというような形になるんじゃないかというものを踏まえて、今、外国人の問題、まあ、犯罪が多発しています。この間も外国人の方の犯罪で、半分近い45%ぐらいがベトナムの人が多いいというのが出て来ました。これは今日です。クルドの人の件ですけども、こういう形で『懲役8年の性犯罪クルド人。確定なら、服役後、強制送還』というね、二度目だったので、もう前の執行猶予が消えているんです。こうなるようになっていきます。本人は抵抗している様ですけど、この難民の問題。

本当に政治難民だったかと言うと、産経新聞の調査によれば、トルコでは、クルド人の副大統領で国会議員は二桁も居る。そして産経の記者が、このクルドの人達の故郷に行ってみたら、別に政治的な弾圧を受けている訳でも何でもなかった。農閑期に出稼ぎに来るような感じで日本に来ていた。だから、これが3回ぐらいの難民申請を続けて、月に10万円近いお金をタダ取りしてきたということで結構、反発が起きています。

あれだけ移民を擁護していた大野知事がついに国会議員に、こういう犯罪を取り締まってくれと言い出し始めました。ただ、我々は、やっぱり外国人だからとか何かって言うこと以前に、本質的な問題で移民の問題とか、所謂、多文化共生のこととかをちゃんと考えなきゃいけない。

ちょっと長くなっていますが、こういうものを本当に本質的な問題から考えなきゃいけないと思います。そういう意味で、今日は皆さんにお集まり戴いて、ご意見を伺って議論してみたいということでもあります。これは、もうヨーロッパやアメリカのトランプ大統領がアメリカでやって来た移民問題。或いはEUが今、転換し始めている移民問題、そして何よりも今度トラブルが起きそうな中国の中にチベットやウイグルの問題と、色んな問題があります。

こういう問題で、やっぱり我々がどういう姿勢を示しているかということもやらなきゃいけないなあと思っています。そういうことで、まず、ご出演の皆さまからご紹介していきます。石平さんは参議院選挙で当選なさいましたけど、会議が延びているので終わり次第、直ぐ来ますという連絡がありました。石平さんは後程、紹介します。そしてウイグル文化センター理事長のイリハム・マハムティさんです。お久しぶりです」

イリハム「お久しぶりです」

水島「歴史学者で麗澤大学国際学部准教授のジェyson・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「宜しくお願いします」

水島「新党くにもり神奈川代表、グリスタン・エズズさんです。宜しくお願いします」

エズズ「宜しくお願いします」

水島「最近、お会いできなかったんですけど、エズズさんは前の選挙で、我々の候補とし

て出て貰いました。あの時は変なことを言う奴も居たんですよ。もう、ちゃんと帰化しているのに、帰化した人は三代まで立候補しちゃいけないようにしようとかいうことがありました。色んな意見があると思いますけども、我々は、エズズさんが本当に日本人らしい日本人だと思っています。ただ故郷や祖国は今、形としては滅びちゃった祖国ですけど」

エズズ「はい」

水島「そういう故郷を忘れない女性として、私達は推薦して戦いました。そういう方です。それから台湾独立運動家の盧エリカさんです。宜しくお願いします」

盧「お願いします」

水島「南モンゴルクリルタイ常任副会長オルホノド・ダイチンさんです。ダイチンさん、こんにちは」

ダイチン「あ、こんにちは。宜しくお願いします」

水島「はい。お久しぶりです。番組は観ていますが、直接お会いする機会が中々無かったですね。そしてエルドリッチ研究所代表のロバート・エルドリッチさんです。宜しくお願いします」

エルドリッチ「宜しくお願いします」

水島「はい。今日は、こういうメンバーでお送りします。石平さんは間もなく来ると思いますので、その時に紹介します。日本に於ける外国人問題を皆さんの視点から、どういう問題があるか、まあヨーロッパでもアメリカでも今、移民問題が言われていますけれど、どんな感じでお考えになっているか意見を伺いたと思います。マハムティさんから」

イリハム「はい。いや、もう私は勿論、昔からそういう自分の民族問題を言っていた時、まず来日した人々に対して、ちゃんと法律をつくって対応しなきゃいけないという提案をずうっと話してきたんですけども、今回、非常に残念なのは、選挙の中心が外国人問題になったことで、とっても残念に思います。国内でやることは未だいっぱいある。私は今回の選挙が国防問題より外国人問題で人気になったことは、非常に…」

水島「そうですね、話題がそっちになっていますね」

イリハム「そこも今、まさか台湾の中から、そのまま中国の一部になっちゃうっていうぐらいの危機を見ながら…」

水島「ああ、今、そうですね」

イリハム「日本人は勿論、台湾問題に関心ない人が多いですし、何故、特に40代以上の方らが、この外国人に対して、ここまで恨んでいるのか。勿論、問題がいっぱいあるのは認めなきゃいけない」

水島「うん」

イリハム「でも、その問題があることと、それを解決する法律をつくらないで、一気に外国人が悪いという立場から今後の政治的な動きをするのは、まさか長い間、中国を批判して来た日本人の侵略主義者っていう人間に対する正しい…」

水島「ああ、中国が言っていたね」

イリハム「はい。優しい心を持っていないという批判が、今回の選挙を世界的に報じる色んなメディアでは、そういう報道が起こると」

水島「うん」

イリハム「これは将来的に、やっぱり日本人はそうだと。それは日本に来て日本を愛して、日本人と仲良くしたい我々が全世界にいったところで、あの国に行って良かったって言葉が何だったのかっていうことが、私にとっては外国人を受け入れたのは日本政府だし、日本の法律で許可したでしょうし、でも、それを、ちゃんと整備された法律の下で日本の法律を侵さないでやらなかったっていうのは、来日した外国人だけの問題なのか、日本は法治国家として、日本国として自己責任もちゃんと考えて、今後、正しい道を歩んで、今迄、日本を愛した外国人を敵に回さないことが一番、大事ではないかと思います」

水島「その通りですね。イリハムさんは前にウイグル協会とかでね、色んな形で政治家とも付き合ってきたことは、私、知っています。どれだけ失望したかっていうのもね、私は知っていますんでね、こういう気持ちはよく解る。はっきり言いますと、例えばウイグルの問題があって、わあ〜となった時は、議員さん達が集まって、例えば岐阜から出た、ねえ、あの人が代表になって色んなことをやった訳です。

それからウイグル協会の、ごめんなさい、失礼だけど女性の会長が居たじゃないですか」

イリハム「ああ、ラビアさんですね」

水島「そう。ラビア・カーディルさんね。カーディルさんが居て、我々も全国中を周って講演会のお手伝いしたり、私もイベントをやったりしてきました。そういう盛り上がった時は、やったけども、いざ、安倍内閣が中国と仲良くなったら、途端に、みんな、やめちゃう。本当にそうだったですよ。私、覚えています。こいつら何だって、まあ自分だけ格好良く言うつもりはないけども、実際、そういうことありましたよ。

政治状況によって振り回されたところがあったと思います。沢山の問題が他にあると思いますが、確かにそういうことがあったよね」

イリハム「そうですね」

水島「だから、こういうことがね、ただ外国人が悪いとかいうようなことで済む問題じゃなくて、かなり日本の政治家や我々日本人の中にも、今日の外国人問題のことで大事な事があると思いますので、厳しく言って貰った方がいいと思います。有難うございます。ではモーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。今日、呼んで載いて有難うございます。私は、日本が割と長いので、日本に来て、少しずつ自分の考え方が徐々に変わりつつあって、当然、アメリカ生まれ、育ちで、そういった歴史観の環境の中で育ったんですけど、日本にやって来て、この日本の立場から物事を見る様になったら、80年前まで日本軍がアジア解放の為に戦って来た。私は、そのことが20世紀の最も輝かしい出来事だと思っています。

それと対照的に、今のアメリカの東アジアの支配と比べれば、やっぱり違うなあと思って、日本が抱えている問題は様々だと思いますが、先程、イリハム先生がおっしゃったよ

うに、私も最近の選挙に関する海外の報道の仕方を見て、やっぱり西洋人は強い日本を恐れているなあと、また日本人がリードを執って、またアジアを解放しようとするのではないかって何処かで恐れていると思います。

参政党が躍進して、参政党に関する色々な意見があると思いますが、参政党のサポーターが侮辱されている訳です。この参政党だけじゃなくて、その支持者が極右とか、陰謀論者とか、そういったレッテルを貼って、強い日本を求めている日本人を侮辱することが非常に目立った訳です。

どういうことかと、私が考えている日本の最も深刻な外国人問題が、未だアメリカに占領されていることじゃないかと思っていて、川口とか、そういう問題もあるし、色々な外国人、犯罪率が上がっているとかでも、それに比べれば、もうF35戦闘機を持っている外国人が、やっぱりヤバいじゃないですか（笑）」

水島「（笑）」

モーガン「犯罪率が上がって、それは良くないんですけども、戦争を勃発させて、武器売買ビジネスで儲かりたい。もう大勢が死ぬ可能性を充分、帯びている、そのような外国人の連中が本当に危ないなあと思っています。

何故なのか解らないですけども、その問題が全く見えていない、見られていない、透明になっている様な気がします。例えば、参政党のさやさんが、ロシアのメディアとインタビューして、かなり批判を受けていると言われていたのですが、読売新聞の記事を読むと、自民の森山幹事長は、記者会見で具体的な対策について検討を重ねて行きたいとか、まあ、自民党がそういうことを言っているんですけども、同じ自民党がワシントンの圧力を受けてLGBT法案を可決したじゃないですか」

水島「はい」

モーガン「その外国人問題は大丈夫ですか」

水島「ねえ。よく言うよっていうね」

モーガン「ねえ。よく言ったなと思いました。要はロシアのメディアとはインタビューしてはいけない。それは危険ですと。でもアメリカの影響なら、いくらでも言われるがまま行動しても、全然、恥ずかしくない。そのことが見えなくなっちゃったことが非常に残念だなあと思っています」

水島「そういうことですね」

モーガン「さすがに8月15日が迫って来ている中、ニューヨークタイムズがお馴染みの反日記事を出しまして、今回はマーティン・ファックラー（Martin Fackler）っていう、反日活動で頑張っている人が、7月28日に、要は、先の戦争で戦った人々が後悔しているということを強調した反日記事を出したんですけど、それが、さすがアメリカの左翼ですが、アメリカの保守系も日本を馬鹿にしている記事が結構、多く出ています」

水島「うん」

モーガン「日本がファシストとか日本が極右とか。それでウイグルとか台湾とかモンゴルとかの方々の前で、敢えて言わせて戴きたいんですけども、アメリカはアジアの解放の

為に動くつもりは無いです」

水島「うん」

モーガン「それは昔の日本だったんです。アジア解放。アジアを愛して動いたのは日本です。その日本が今、本当に必要だなと思っています」

水島「うん」

モーガン「強い日本。リードを執ってアジアを解放する。中国共産党から解放する日本が必要だなあと思って、アメリカが日本を支配している。アメリカが東のアジアに関わっている限り、そういう夢は実現出来ないと思います」

水島「なるほどね」

モーガン「これからの中国の出方とか、中国が台湾に包囲網をかけるという可能性は充分、あると思いますが、社長が先程、冒頭でおっしゃった通り、その場合でもアメリカは動かないです」

水島「うん」

モーガン「守りに来てくれないうです」

水島「はい。その通りです」

モーガン「その時、強い日本が必要だと。強い自衛隊が必要だと。アメリカに見捨てられるのを待っているんじゃなくて、先に積極的に動いて、この日本と台湾と東アジアの解放の為に、日本が強くなって戴ければと思っています。アメリカという外国人問題の呪縛、80年も続いてきた呪縛から自由になって戴きたいと思います。以上です」

水島「はい。有難うございます。この視点も大事でね、占領軍がそのまま続いているっていう、この視点が日本の保守を称する人達には全く欠けている状態でね。それで、その上で、ああだこうだと言っているっていうことだと思っています。有難うございます。じゃあ、グリスタン・エズズさん、お願いします」

エズズ「はい。私の考えとしては、外国人問題、移民問題っていうので今、騒いでやっているのは、中国の思惑通りに事が運ばれているとしか思えないっていう状況です」

水島「うん」

エズズ「何故かと言うと、最近、韓国でもありました。台湾でもリコールが失敗しました。日本の選挙も日本を大事に為さる方々が、あまり選出されていない結果になっておりまして、結論として考えた時に、移民問題を最初に推奨していて、新しい日本人をつくるんだとやったのが政府、某太郎様であって、この国策で沢山の人々を受け入れました。

でも、その中で一番、得をした集団は何処かと言うと中国ですよ。一番、移民を数多く送って来て偽の会社を創って、それに紐づけて家族、三代まで連れ込んで移民して来ている訳ですよ。お爺さんの代、団塊世代の代、孫の代といった三代も日本に移民が出来るの？そんなのは全てが、ただ乗りじゃないですか」

水島「うん」

エズズ「これは資源を全て食い荒らす、いざという時に武器として使える国民動員法があるのも知りながら、この政策を推し進めて一番、数多く増やされたのが中国人ですね」

水島「その通りです」

エズズ「それで日本では今になってから全部、移民があ、外国人があって言われるんですけど、じゃあ、実際、その外国人と付き合うというのは、その背景にある国と付き合うという話なので、親日国家の移民を歓迎すべきじゃないかなあと思います。何故かと言うと国策でやる訳だから労働力が欲しいです、じゃあ、この国と経済協力を深めましょう。だったら、その国に集中して、それは自分にとって脅威になる国ではなく、親日で友好関係を築きたい、日本と是非、ビジネスやりたい。日本と一緒にウィンウィンの関係、創りたいていう国々限定で、イリハム先生がおっしゃった通りに、法整備を創った上で増やすっていうことをやらなければいけなかったんですね。

じゃあ、今になっては一掃して全部、外国人があ、移民があって言われたら、その中でも日本の社会の中で役立ちたいとか日本の為に働きたい。日本も愛しています、自分の第二の祖国として生きていますという方々に対して全部、冷たく掌を突き放してしまったら、いざ、戦えとなった時に誰と友好関係を継続するんですかとなるので、日本が益々孤立する状況をつくってしまう危険性があるんですね。

だから、今回のその移民問題っていうのは、イリハム先生が言ったように、それが焦点になっちゃうんじゃないくて、もっと大事にやれる国防問題とかスパイ防止法とか、じゃあ、2027年に戦争が起きた時に、どういう対処すればいいのか」

水島「うん」

エズズ「じゃあ、今のままだと間に合わないですね」

水島「うん」

エズズ「私達も何年も前から、ずっとウイグル協会を開始してイリハム先生を始め、中国は日本にとっては脅威だって言い続けている訳ですよ。モンゴル人やチベット人も50年近く言い続けている訳ですね。でも一向に中国への警戒とか中国に対して何か対策が執られた訳が無いじゃないですか。大量に移民されても今、色んなものが持ち運ばれて来て、麻薬とかも全部、日本が拠点にされて世界中に撒かれているということも起きてる訳ですし」

水島「そうです」

エズズ「電子的な詐欺等の主犯格も全部、中国人勢力になっているし、世界中のあちこちに拠点を置いて、電話で詐欺を行う集団とかも拠点を創っているのが、中国な訳ですね。でも、その裏に中国政府が統治した移動手段の会社がついているんですよ。中国移動 (China Mobile) とか中国電信 (China Telecom) が後ろについている、これは結局、中国政府が国家戦略でやっている訳ですね。いざ、何か起きた時に、じゃあ、アメリカでも内戦が起こせるぐらいの勢力を持っているし、日本でも何も言わず、二人に一人、中国人が当たり前っていうような世界になってしまっているし、これが異常に危険な、しかも対策が今の侵攻されている問題に追いついていない。

今、堂々と中国人に中国自治区だと言われて、日本に来て中国に居たような感じです。

だって大阪に行ったら中国語しか聞こえないから、ここは中国だって言っている中国人の子供達が居る訳ですね。それぐらいの状態をつくっておきながら、じゃあ、一斉に外国人問題、移民問題、今更、ちょっと遅いかもしれないなあって、そういう悲しい気持ちで見えています」

水島「全くそうですね。この間、大阪に行っていましたけど、梅田の辺りは殆ど中国が買っちゃっている。或いは、有名な所と言えば、札幌やニセコは殆ど中国人が買っています。前はオランダとかオーストラリアとか白人系の人達が居ましたけど、パウダースノーでスキーの有名な所だったからね。今、殆ど北海道は、そういう所だし、札幌市で言えばラーメンで有名だった狸小路ってところは100%全部、全店舗、中国人というね。今、エズズさんが言った通りだよな。

そういう所が全国中、東京も大阪もみんなそうだっていうね。日本政府はそれに対して、何の策も打っていないですよ。そういうことを言いながら、表面上は今回、今、ついでに中に入って申し訳ないけど、日本政府が言ったのは同じことだよ。入国を色々厳格にするとかね、ずっと昔から言っていた（失笑）、前に移民問題を議論した時、我々が言ったのは、今回、落ちた自民党の参議院議員が居ますけど、『社長、必ず帰すんですから、彼らは帰りますから大丈夫です』って言っていたけど、帰りっこないんですよ。

その通りで、帰る人と帰らない人って色々あるけど、ああいう制度上では帰らない人が圧倒的に多いんです。これは別に帰る、帰らないという問題以前に、そういうことっていうのは守られないっていうね。これは何処の国に居ても原則ですけども、今、イリハムさんが言ったような法律とか何もね、一応、創ったとは言ってますけども、じゃあ、ちゃんと適用をしているかって言ったら、日本の政治家や入国管理とか、そういうのはやっていないですよ。

今言ったように、そういう形で国防動員法の国がどんどん移民の中で一番、多いと言うか長期滞在者というのかな、その定住者が今、380万人。また、これに80万人を増やすと親中派の外務大臣が言っている。このイメージは殆ど中国人ですよ。こういうような形の現実を今、お話し戴いたと思うんだよね。我々の国は何の手当もしていない。うん。

それで、よく外国人の問題だって言うよっていうイリハムさんの思いは、よく解る。何にもやっていない癖に、ここは凄く大事な事だと思えますね。これは中々指摘を戴けないところですね。では、盧さん、お願いします」

盧「はい。有難うございます。そうですね、私は台湾の問題が最も凄く深刻ですけど、日本では外国人問題って一言で言うのが、ちょっと浅過ぎるのかなあって正直、思います。やっぱり、我々みたいに本当に日本が大好きで、しかも技術を持っているし、日本の同僚とか、日本の人と一緒に日本を良くしようっていう人がいっぱい居るんです。だから何か外国人だと言われると、そこは、やっぱり差別を受けたっていうのもありますし、一方、その外国人問題の中に問題があります。

ただ、その問題を起こしているのが色んな外国人ではなくて、その中で犯罪率が高いのは、やっぱり中国人だったりとか今はベトナム人とかだったりする訳ですけども、皆さんと同じ考えですけど、日本政府が、例えば中国人だったりとか或いは犯罪率が結構、高くなっているベトナムの人達に対する対策っていうのが無いんですよ。無いですし、自分も台湾問題もあるから、その目線で日本の問題を見ると、中国人が多過ぎる。中国

人が多すぎるとというのが、多分、一般の日本人は、あまり何が問題なのか誰も真剣に考えていない。

だけど、そこをちゃんと考えると中国人、特に難民とか亡命とかで移民したりする人も多いと思うんですね。だけど日本人になった中国人って、本質は日本人じゃないんですよ。結局、本質は、やっぱり中国人のまま、日本人になったら何が出来るかって言うと、投票権、むろん立候補も出来るし、そうすると、日本の政治がどんどん中国人に乗っ取られるということ、何故、日本政府は今迄、真剣に考えないんだろうなあって、私は凄く危機感を持っているんです。

だから日本の政府も、一般の日本人も、誰もそこに真剣に考えていないっていうのが凄く残念だなあと思っています。日本の国を強くしたいのなら、やっぱり中国人とか害虫を（笑）排除しないと強くなれない。そういう中国人とかを排除しない代わりに、我々が、その外国人を責めるっていうのが、さすがに、やっぱり、いくら日本が大好きだと言っても（笑）そう言われると心が傷つくんですよ。

やっぱり日本は国際化と言いながら全然、国際化にはなっていないっていう、やっぱり、何か失望を覚えるとか、我々は本当に日本と手を組んで歩んでいきたい外国人を失望させないように、ちゃんと真剣に、もっと真剣に、より一層、真剣に考えて欲しいなあって、正直、思います」

水島「そうですよね、やっぱり一番、よく言われていることですが、外国から入って来る人達を労働力としてしか見ていない。安い労働力とか便利な労働力とか、だから人間として見ていない。この人達は人間ですから考えもするし、食事もあるし、病気にもなるし、結婚もあるし、恋もあるとか、そこをハッキリ言うと、丸ごとの人間扱いをしてない、経済的なコストとしてしか見てないから、安い奴がいいとかね」

盧「はい」

水島「こういう形でしか、人間として見ていないところがあるっていうねえ、これは本当にあったと思いますね。今もそういうところがあると思いますけどね。いや、もっと言うと日本の労働者も最近、そういう風に見られているというね、そういうところは経済、まあ、新自由主義って言うんですけどね」

モーガン「正に今日の経済新聞のトップが、その通りです」

水島「ああ…」

モーガン「経済学者が、正にそういう風に見ているということになっています」

水島「なるほど。それは、また紹介して下さい。盧さん、有難うございます。では、ダイチンさん、お願いします」

ダイチン「はい。今日はオンラインで参加する機会を与えて下さって、本当に有難うございます。やっぱり外国人問題っていうのは、今の世界政治の中で、正に激変中の凄く注目を集めている著しい問題ですね」

水島「はい」

ダイチン「日本に限らず、例えばアメリカでもアメリカ・ファーストですね。まあドイツ

でも、そういう政党が凄い。イタリアもそうですけれども、日本でも今回の参議院選挙で、こういう注目を集めているということ自体、私達は何故、起きているかっていうことを考えないといけないですよ。近代国家としては、こういう外国人問題っていうのは、慎重に扱わないといけないです。ただ、その外国人の問題に対して、全部を排外的に立ち向かうか、或いは、友好的に移民政策を執るかっていうことによって、勿論、この国の政策によりますけど、どっちにしても主権国家としては、その国の国民の主権ですよ。

その国民の意向通り民主主義国家だったら、国民の意向は反映されているっていうことを、私達は見ないといけないですね」

水島「うん」

ダイチン「これは独裁国家だったら全く違うということが、解らないといけないです。例えば日本のことと、中国のことっていうのは全く違う訳ですよ。同じ国って言うているけど、私達は中国に対して、そういう共産党政権っていう風に見ているんですけれども、本当の意味での民主主義国家ではないから、その国、中国共産党政権がチベットに対して、ウイグルに対して、或いは私達の南モンゴルに対して侵略している行為と、この外国から日本に入って来ている移民、或いは、留学生として来ている、或いは、合法的に入っている会社員ですね。

それが段々日本に長い時間、おることによって帰化していくか永住権を持って行くかっていうのは、基本的に、その国、日本の法律に基づいて行われているものですね。問題は、そこにあるんじゃないくて、やっぱり違法になっている外国人のことを言っていると、私は感じております。例えば今回の参政党の参議院選挙での、日本ファーストですね。そこに問題があるとは思わないです」

水島「うん」

ダイチン「日本語で言うと、それは日本優先ですね。或いは、日本国民優先っていうのは主権国家としてあるべき姿だと思います」

水島「うん」

ダイチン「ただ、それは優先主義と排外主義というのを、ごちゃ混ぜにして、日本ファーストと言っているのは排外主義であると解釈するのは、問題ですね。そういうことではないということ、私達は討議していくべきではないかなと思います。はい」

水島「なるほど。はい。おっしゃったように、参政党は『日本人ファースト』という言い方をした。それから、その前の在特会系の人達は『日本第一主義』という言い方をした。我々は『日本を主語とした』という『日本を主語とした政治』をしようというように、まあ、みんな、微妙なニュアンスが違うんですけれども、そういう流れの中で、我々の国の事、自分達のことは責任を持って、自分でやれるような政治を、日本を主語とし、アメリカでも中国でもない主語とした政治をやるっていうのを20年前に、このチャンネルを開いた時のスタートはそういうとこだった訳ですけど、今、ダイチンさんが言うようにね、その辺のところのニュアンスを、きちっと分けて行かないといけないし、見なきゃいけないということですね。その通りだと思います。では、エルドリッチさん、お願いします」

エルドリッチ「はい、お願いします」

水島「はい、どうも」

エルドリッチ「有難うございます。今日の話題が凄く重要だと思っていますね。この機会を作って下さった皆さんに感謝を申し上げたいと思っています。この議論は多分3時間では足りないと思います。私自身も多分一人で3時間ぐらい喋れる問題だと思っています」

水島「はい（笑）」

エルドリッチ「私は来日してから35年になるんですけれども大体、数年前に永住権を取得しました。その前までは、所謂、ワーキング・ビザとか就学生ビザ、日本語を勉強する為のビザとか留学のビザ、更に配偶者のビザとか色々経験して来たんですけれども、未だ話になっていないんですけれども、地位協定の立場で…」

水島「ああ」

エルドリッチ「その立場で6年ぐらい滞在させて戴いたんですけれども、だから、色んな立場で、この35年間、こういった問題を見て来たり体験したり、考えて来たんですけれども、まず、多分、見ている方々が何処まで深く考えて来たか判らないんですけれども、ちょっと整理した方がいいかなあとと思っています」

水島「はい」

エルドリッチ「恐らく皆さんも同じ結論というか、意見になると思うんですけれども、恐らく日本に今、居る外国人達が少なくとも五つの種類があるのではないかと思う。例えば、自分が移民のつもりで来ている人達で、恐らくその方々の殆どは最終的に帰化するんだということです。その中で、何かの政治的な問題を理由に亡命している、或いは、亡命を希望している方々も、そこに含まれていると思う。

もう一つのグループは、中長期滞在者です。私は多分そこに入っていると思う。日本の帰化の申請は未だしていないので、中長期滞在者という風に考えています。

3つ目は恐らく短期的に滞在する労働者の外国人達です。4つ目が本当に短い間しか滞在しない観光者の人達で、観光者の中には初めて来る人達も居れば、もう何回も何回も来ている、日本が大好きで来ている人達。そして、さっき申し上げていた地位協定で滞在することが認められている人達。それがご存じのように約10万5千人の米軍、そして、軍属、家族が居る。合わせて相当の数になるんですけれども、その中で、どれが一番、犯罪しているのかという統計が多分、あると思うんですけれども。

よくマナーが悪い、何か問題を起こしている人達の多くは、感じとして多くは、やっぱり観光者、観光目的で来ている人達。或いは、最近、殺人事件もあった訳ですけれども、このベトナムの人がやったこととか、そこで外国人達の中に、更に色んな人達も含まれている。

私が来た35年前に通っていた日本語の学校には、欧米系の人達とアジア系で、アジア系では韓国と中国が圧倒的に多かった。ほぼ毎日、私達はお昼を一緒に食べながら、或いは、休憩の時に日本に於ける生活について話し合ったりしていた。例えば欧米系の人達が体験したことの問題を含めて、そして韓国、特に中国の方々が体験したことが、やはり、かなり違っていた」

水島「ああ」

エルドリッチ「実は今、思い出しているんですけども、お互いが恵まれているんだなあという風に思っていた」

水島「ほお」

エルドリッチ「もし、何故なのかという、質問があれば、あとでお話します。それ以降、最近は、特に欧米系、アジア系以外の色々な国々から多くの人達が来ている。アフリカ、中東、中央、南アジア、南米とか、だから非常に多様化しているのは事実だと思っている。

そこで私の国のアメリカと日本とを比較した場合、やっぱりアメリカは移民の国ですけども、大体、時代毎に一番、多く来られた移民が居て、約20年ぐらい彼らが生活に慣れるまで、要するにアメリカ人になるまで時間をかけて、その次の国から人を受け入れていた。要するに時代毎に大量の移民を受け入れて、同一化させて、言語的、価値観的、文化的に、彼らが完全にアメリカ人になってから次の方が入っていたんですけども、今、見ている限りは、日本は無条件と言っていいぐらい、無差別に色々な所から受け入れていて、体制が出来ていない。

そして国民の覚悟が出来ていない。だからと言って差別的とか排他的、敵ではない。この不満があるのは当然のことだという風に思っています。つい最近、ある本を読んだら、アメリカについて排他主義的かどうかという議論だったんですけども、その学者達が、その調査結果で分かったのが排他的ではない。

だけれども、同一する、アメリカ人になることが大きな前提である。だから、それを強く求める外国人に対しては反対していないけれども、アメリカに入る限りは、アメリカの生活に合わせる、アメリカ人になるということです。ところが、そこで最後の発言と関係するんですけども、この番組で何回も申し上げていたんですけども、日本に来る外国人の多くは先程、お話もあったんですけども、やっぱり日本が好きで、長く日本に住みたい人達が多いんですけども、その人達が、例えば日本の習慣、文化、マナーとかが場合によっては判らない。けれども日本のことが好き」

水島「うん」

エルドリッチ「そこで日本人の行動を見て動く、行動する。そこで私を含めて外国人達は、日本人に、よりしっかりして欲しいと思う。つまり、日本人が大切にしている事、マナーとして、価値観として、これがぶれない形で、場合によって厳しく私達外国人に教えて欲しい。同じ意味で、もっと政府がしっかりして欲しい」

水島「うん」

エルドリッチ「冒頭でイリハム先生がおっしゃっていたと思うんですけども、やっぱり外国人として日本に入っている限りは、日本のルールを守るべき、法律を守るべき、だから日本政府は厳しくしてほしいと思う」

水島「うん」

エルドリッチ「だって私達が、あくまでゲストであって、合わせなければ、いずれ帰国せ

ざるを得ないことになる。なので、厳しくしていいと私は思っています。そうすると犯罪を減らすことが出来る。そして、その訳の解らない土地の購入問題が、ある程度、解決できる。そして本来ならば、あり得ない外国人に参政権を与える議論も無い」

水島「うん」

エルドリッチ「はい。そういったところで、まだまだお話があるんですけども、取り敢えず、ここで終わりにしたいと思います」

水島「はい。有難うございます。日本人が大切にしている事を日本人自身が大切にしていないってことは、本当にその通りでね、まあ、そういうことがあると思いますけども、未だ石平さんが来ないので、このまま続けていこうと思います。モーガンさん、今、皆さんの話を聞いて、どうですか」

モーガン「はい。日本人ファーストが非常に重要だなあと考えていて、アメリカ・ファーストと日本人ファースト、ほぼ意味が同じだなあと考えて、それが自分の国がナンバーワンとか、それから傲慢的に言っている訳ではないですよ」

水島「うん」

モーガン「自分の国の国民が自分の国のことを決めることを意味すると思っていて、それは当然なことで、日本国民が日本人ファーストを叫ぶことを見て、私は希望を持ちました」

水島「うん」

モーガン「それは外国人を排除するとか、そういった意味では無いと、私は感じていません」

水島「そう、思いますね」

モーガン「その意味は、逆に言えば、自民党ほどアメリカ・ファーストの組織は居ないんですよ」

水島「(笑)」

モーガン「ずうっと前から、70年間、アメリカ・ファーストですよ」

水島「はい」

モーガン「この自民党と、この日本の政府」

水島「はい」

モーガン「やっぱり、それを見てウンザリになったんじゃないかと思って、じゃあ、これから日本人が日本のことを決めることが当然だと言っている人が増えていて、それが日本人ファーストの意味じゃないかと思っています」

水島「うん」

モーガン「もう一つですけども、体制。先程、エルドリッチ先生がおっしゃった体制。最近、読んでいる本ですが、イザベル・ウィルカーソン (Isabel Wilkerson) という人が

書いた本。彼女はアメリカの評論家ですが、インドのキャスト（カースト（Caste System））制度と言うんですか、社会の構造が、やっぱりアメリカにもあると。人種差別よりもカースト制度が一番、問題になっていると言って、要は色んな人種が、そもそもあったカースト制度の中に入る訳です」

水島「ああ、なるほどね」

モーガン「それがアメリカの体制です。入って来る移民は、まず、一番下のカーストで、そこから梯子を登って上まで行く訳ですけども、日本ではカーストが無い訳ですね。そのカースト制度が出来たのは、これ、私の考えですけどもアメリカでは奴隷制度と先住民のジェノサイドがあってから、カースト制度が出来た訳です。日本では当然、そういう歴史が無いので日本人って平等」

水島「ああ、そうか」

モーガン「日本では、カーストと言うより平等が当然じゃないですか。よく外国人としては毎日、感じることですよ。私は人種差別を受けた事が無いと。ただ鈍感で判っていないかもしれないけれども、受けた事はないような気がして、他の所から来る人の話を聞いても、いやあ、特に日本人は、あまり人種差別はしないと。そういう話が私の耳に入っていて、体制ということは、そもそも日本ではカーストが無いし、奴隷制度が無いし…」

水島「うん」

モーガン「外国人を排除するっていう強い歴史が無い訳ですので、移民っていうよりも、やっぱり日本にやって来る人は、この日本を愛することを条件にして、同化するか、しないか、やはり、それが大きなポイントだなあと考えていて、入って来る移民と、こう、まあ、波がね、打ち寄せて来るのとは、ちょっと違って、永遠に同じ日本があって、それに入って来る人が平等に受け入れられると同時に、自分がその国を愛するかどうかって、それが、やっぱり移民国家じゃないですので、体制になるかなあと考えて」

水島「うん」

モーガン「ということは、移民国家は何処かで搾取体制があったから、西洋は、何処かで移民を受け入れることになったじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「日本はアジアの国ですので、そういうのは無いので、やっぱり、今迄あった、もう一度、日本を蘇らせて、取り戻して平等的な日本で外国人を受け入れるしかないなあと考えて、まあ、日本人としてアメリカを真似しないで、外国人対策を決めるべきだなあと思いました」

水島「そうですね。おっしゃるように日本には奴隷制度、カーストっていう制度は無い。さっき盧さんが言った台湾と日本っていうのは、私もずっと台湾に関わって来たけども、そういう意味での人種的な差別は本当に無いと思いますね。まあ、一部の人はあるかも知れないけど、日本人自体が殆ど無いと思いますね。だからねえ、どっちかって言うと、変わった家族とか、みんなね、家族的な感じですよ。

だから私も台湾の人と随分、声明運動や色んな事を、ずうっとやって来たんだけど、やっ

ぱり、そういう感覚ですよ。兄弟って言うかね。ただ、今、大東亜戦争の問題で言うと、我々が思っていたのは、私も歴史のことを調べた時、兄貴の感覚。つまり、どっちかと言うと、家族だけれども弟分ってね。

アジアの解放っていうのはね、これをどう見るかっていうね、完全な平等として見ているよりは、俺達が先に近代化して強くなったから、アジアの弟分達を、みんな、家族の様にするというね、こういう感覚。アジアの解放っていうのは、今言った奴隷解放とか何かと言うよりも、むしろ兄弟の窮状を救うみたいな、家族の様に一緒にアジアで進んでいこうぜっていう感覚に近いところがあってね。

だから、おっしゃるように、本当にそのところが凄く大事で、カーストが無かったっていうね、勿論、色々理屈を言う奴は居ますから、一応、言っておきますと、インドで言う不可触賤民とか言われるようなものは無い。ただ、昔、言われた部落とか穢多非人（えたひにん）とかいう形の、江戸時代にあったそういうものっていうのは、実際には少数、あった訳で、今でも、それが全く無くなっているというね、まあ、内実は判りませんよ。

ただ法律的には全くないし、それから、もう一つ言うと、私もそう思う、モーガンさんが今、言ってくれましたけど、アジアの人とか色々な人に差別意識って本当に持たないというのは、私自身、そういうのがあるんですよ。状況が違うだけで、ただ日本に来てくれたら日本の法律に従ってというね、郷に入れば郷に従う。

だから、日本人がブラジルへ移民した人達が居るんだけど、みんな、従っている訳ですよ。あっちのラテンの国、ブラジルへ行ったらブラジルの中で、或いはペルーならペルーとかハワイへ行ったらハワイとか。こういう風にやっている訳でね、その辺は今、おっしゃるように日本人の中に、まあ、それは一部の変わった奴は居るかも分かんないけど、基本的にはそういう人種差別的な意識は全く無い。アジアの人達と言えば、みんな、兄弟というかね、同じようなという感じがあるんだけど、ただ、今、LGBT問題とかああいうのは来るし、少数者っていうものと、そういう移民で来る人。定住者で来る人。こういう人に対する姿勢をダブらせようとしている勢力もある訳、同じイメージでね」

モーガン「はい」

水島「だから、そのところはねえ、いや、それと、もう一つ、さっき台湾の話をしましたけど、盧さんね」

盧「はい」

水島「私が凄く嫌だと思っているのは、蔡焜燦（さいこんさん）先生とか、黄昭堂（こうしょうどう）先生とか、私は本当に仲良くさせて戴いて、今、もう変わっちゃいましたけど、民視とか自由時報とか、ああいうところの社長や、みんなと相談して、実は、うちの会社は業務提携したんですよ」

盧「はい」

水島「ところが、どういうお立場か正直、判っていないけど、まあ、一種のクーデターがあって独立派から民進党派へ変わって、みんな、追い出されちゃった。それで、影が薄くなっちゃったんだけど、ただ、そういう中でも兄弟意識っていうか、私は大変、洪尚徳（こうしょうとく）先生を尊敬した人だけでも、今、言ったように、そういう意味ではね、台湾の人に対しては無かったと思うしね。

ただ、私が厭だと思ったのは、台湾と日本は運命共同体って、やたらと立派に言う奴が居る。それから一緒に行った日本人が居て、蔡焜燦先生は凄い歓迎をしてくれて、食事をもてなして下さい」

盧「はい」

水島「水島さん、この軍歌を知っていますか、みたいにね、色々お話が出来て大変、嬉しかったけど、私はそれを見て、それで日台友好、万歳とかやって喜んでいる連中が、何、日本に戻って何をやっているんだ。いつも台湾に行っては喜んで御馳走になって、台湾はいいねえとか言って、日台友好とか言っているけど、具体的に何も、何もとは言わないけど、具体的な成果が本当に…、今回、こういうものになった時、どうなんだっていうのが、凄くあった訳です」

盧「はい」

水島「凄く嫌な感じだった。ただイリハムさんの問題も、口は立派な事を言うけど、実際にはやらない奴が多かったの、私が李登輝友の会の会員、幹事でもあるから、言っちゃいけないかも知れないけども、内心はそこを凄く思った。本当に台湾が苦しい時、お前らは本当に体を張ってやるのかと。無いんですよ、正直、申し訳ないけどね」

盧「いや、大丈夫です（笑）」

水島「そう感じる時、あるでしょ。まあ、あまり貴方に言っちゃうとね、そうですなんて中々言えないだろうけど。その問題が今回、台湾有事になった時に出て来ると思えますよ。口ばかりで、誠に許し難い暴挙だと言って、それで済ませちゃう」

盧「う～ん…」

水島「じゃあ、我々に何が出来るかっていうことを考えると、これは皆さん、意見が違うと思うけど、私は日本の核武装だと思っている。台湾と本当に連帯してやるとしたら、日本が戦術核の潜水艦型の核武装をして、我々がしっかりすることが、本当の台湾との連帯になると思っている。口ばかり日台連携とか運命共同体っていう奴が、実は凄く多かったんでね」

盧「はい」

水島「私は腹を立てている訳ですよ」

盧「はい」

水島「うん。だって台湾の人も、こういう矛盾を感じる時があるんじゃないかな。あんまり、言い難いかな、みんな、色々あるから」

盧「いや、つくづく感じてはいるんですけど、日本人の立場も解りますよ。相手が目の前に居るから、そこは何か、まあ、恐らく、その場の雰囲気でも共感して感激して、そういった言葉を発したと思うんですけど、ただ具体的に何が出来るかって言うと、多分、誰も深くは考えていないと思うんですよ。う～ん、まあ、そこは人それぞれ事情があるんだろうなあと思って（笑）、あまり深く責めたりはしないんですけど」

水島「うん」

盧「まあ、そこも今回の話もそうですけど、例えば親日の国とか、日本人と本当に運命共同体の国だとかを…、今、何故、日本に外国人が多いかって言うと、労働力不足っていうのも、今、その問題に直面して外から入れなきゃいけないっていうのも解るんですけど、そうかと言って誰でも受け入れるっていう訳じゃないと思うんですよね。そこは選別しなきゃいけないし、だったら、例えば、台湾で今、半導体は凄く技術的な面からとか色々な観点から親日の国と技術提携だったりとか、そこで、その労働を受け入れて訓練したりとか、そういう対策もあるんじゃないのかなあと思うんですよね。う～ん、我々ですら、そんなアイデアがあるのに、何故、政府には無いんだろうって、正直、思ったりすることもあります」

水島「うん。そうだね。こういう問題は、やっぱり具体的な事を言うと、何となくね、色々出て来ると思っているんでね。敢えて言ったんですけど、イリハムさんは、ずうっと長い間、ウイグルの運動を日本の中でもやってきたし、世界中を駆けまわったりしてやってきたんだけど、やっぱり、今日はけっこう、厳しい事を言って貰いたいと思ってお招きしたところもあるんでね。実際、日本の中の中国に対するウイグル運動とか、こういうのは今、どんな感じで見えていますか。うん」

イリハム「うん。厳し過ぎるとウイグル支援者が減ってしまうかなと、ちょっと心配はあるんですけど」

水島「まあ、それはあるかも。まあ、まあまあ、まあ出来る範囲でね」

イリハム「それでもね、日本は我が祖国、第二の祖国になっているので言わざるを得ないところがあるんですね」

水島「うん」

イリハム「さっきエルドリッチ先生が言った通り、最初、この国に入って来たらルール、法律、それを、ちゃんと教えること」

水島「うん」

イリハム「私達の時代、2001年に来日した時、私達の先輩ウイグル人、それから住んでいた町。バイトしていたところも、ちゃんとゴミの分け方」

水島「ああ、分別ね」

イリハム「年配の人と話をする時、例えば社長とかが来た時は、一旦、止まって通したあとに自分がっていうこととかね」

水島「ああ～」

イリハム「これを見て非常に小さなことですけど、これこそが日本のルールですっていうことを、きちんと私達に教えてくれました」

水島「うん」

イリハム「ですからゴミの分け方は、私自身は、ちゃんと家内に教えていたけど、先輩達の奥さんらと喧嘩したとか、ミルクのパックを、ちゃんと洗わないで捨てたから、喧嘩しちゃったと。日本では、これ、駄目だよ」

水島「なるほど。ああ、そうですか、いや（苦笑）そこもあったかな、凄いね」

イリハム「はい。まあ、それは何故かと言うと、こういうものは、みんなの日本人に対する尊敬から来るんですね。その尊敬、誰が相手を尊敬させるのかと言ったら、それは日本人の問題です」

水島「うん」

イリハム「日本人が、私が尊敬されるべき人間だということを教えれば…、でも、それは特に私達が来てから5年後に、こういう問題が大きくなり始めたんですけれども、例えば街中でルールを守らないとか、そんな時、もし日本の不動産屋とかその町の町内会とか、貴方は3回もルールを破ったので、ここに住んではいけません」

水島「うん。うんうん」

イリハム「ここに住むなら大家さんと私達は別の話をしますので、その不動産屋も、あなたがこのルールを3回、守らなかったら、置いてある敷金を貰わないで出て行けっていう話になって、1回、出て行って2回目の所に行ったら何故、前の所に住まなかったのって、前は何処で住んでいたのって聞かれて、そこの不動産屋に電話して理由を聞いたら、ルールを守らないからだ。それなら私達も貸せないって言われたら、人間は、やっぱりルールを守らなきゃと身に沁みます。

いや、そうじゃなくて、お金をくれれば、家も、ちゃんと貸すとか。その中で中国人とか外国人は、そんなことを知らないで、それで段々日本人自身も町内会も不動産屋も、みんな、自分の責任そのものを忘れていく。それで外国人がやりたい放題、お金さえあれば、日本も同じだっていう形になってしまう」

水島「そうだね」

イリハム「ええ。そういうことで、まあ、それと同時にウイグル問題にしても、チベット問題にしても、中国全体の問題、実はウイグルでも、チベットでもモンゴルの南モンゴルでも、日本人が大勢、住んでいるんです」

水島「うん」

イリハム「その状況を、よく知っています。でも彼らは日本に戻って来たら、誰にも伝えない」

水島「うん」

イリハム「何故、伝えないのかと言ったら、一つは研究できなくなってしまう」

水島「うん」

イリハム「生活できなくなってしまう。個人個人の理由で、この国の大勢の人間が馬鹿になっているということを忘れていく。やっぱり個人主義を発してしまう」

水島「うん」

イリハム「日本では学校で誰が一番、いいか悪いかっていうことが無いじゃないですか。共に頑張ろうという集団精神を、幼稚園から教えるんですね。そういうものが中国に行く

と、やっぱり自分のこと、あの集団、私と一緒にじゃないので、私は知らないって言えば、それですから、中国の本質というものを、日本人はちゃんと解っているのに、それを日本の大勢の日本人に伝えない。それによって日本の社会が悪くなっても俺と関係ない。私は国から何か貰いましたか。それは関係ない。私は研究するからと。やっぱり日本人も時代によって変わって行く。その変わったのは、私は30代で来日したので、そこまでハッキリ言えないですけども、やっぱり日本人も自分の小さい頃から学んだものも忘れて行く」

水島「うん、うん」

イリハム「日本人は、来日した人達にルールを守ること、これを一番、大事にさせるっていうことも教えなくなっていく。こういうことによって日本が悪くなっている。もう一つは来年の熱海市長選」

水島「うん」

イリハム「一人の中国人が立候補した。熱海は3万人の町だそうです。その中国人は10年前ぐらいに来日して、ずっと池袋で住んでいました」

水島「うん」

イリハム「池袋に住んでいて、市長になりたくて熱海に移住したと」

水島「うん」

イリハム「彼は熱海に行くまでは、元々日本語学校に入った者ですけども、池袋ですから日本語が出来なくても困らなかった」

水島「そうね」

イリハム「そのまま商売も何でも出来て、熱海に行ってから再び日本語を勉強し始めた。こんな人間に対して大騒ぎだったんですよ」

水島「うん」

イリハム「今後も騒ぐと思いますが、日本人は何を心配しているのか。私には解らない。日本語をちゃんと喋れない。日本人は、日本の歴史が解らない人に自分の運命、その町を任せることにするんですか。何故、それを心配するんですか。ということに今も矛盾を感じてね、何故、日本人の保守系とかが色んな心配をして色んな話をして、何が心配なの。

日本人はそこまで自信を失って、それに対抗する日本人が居なくなっているんですかっていうことを本当に考えるとね、まあ、日本がここまでになっちゃうと、外国人はやり放題になっても、あまり批判しないで下さいって言いたくなるんですね」

水島「うん、本当に、そりゃそうだね（苦笑）」

イリハム「はい。嫌ですね」

水島「これは今の典型的な例みたいな、熱海の問題もね。前に武蔵野市で3か月居たら住民投票権を与えると。3か月ですよ。日本がどういう国か何にも分からない、小学生より分からない人達でも、とにかく3か月、住んだら投票権を与えちゃうと。これはギリギリ

で否決されましたけどね。今言ったようなことも含めて、例えば、さっき言ったニセコだとか色んな所に中国の人が集団で住むようになって、それも投票権を持つようになったら、そこは、もう中国自治区になります。手が出ないですよ。そういう危険とか、そういうのもあるんですよ。あるけれども、そのまま容認して来た。お金さえ払えばというね。ルールを作らなかったんですけど。まあ、そういうことある訳です。エズズさんは、この辺の問題をどう思いますか」

エズズ「私は、イリハム先生が言った通り、日本語も判らないのに、今迄、日本の中で生活できちゃうっていうことは凄くあり得なくて、ちょっと恐ろしい事だと思っています。私が帰化申請をした時、本局に電話で問い合わせたんですよ。その時、貴方は未だ仕事を始めて1年だから、仕事を始めから3年経ったら申請する資格があるんだよと教えて貰ったんですね。ああ、じゃあ、私は未だ資格がないんだと思った時に、韓国人の知り合いが仕事を始めて1年後に帰化されて名前が変わっているんですよ」

水島「おお〜…」

エズズ「免許証の表と裏の名前が違うんですね」

水島「はい」

エズズ「あっ、私には3年かかる。それから資格があると言ったんですけど、何故、韓国人は1年で資格を取れちゃうんだらうって。それで、やっと在日特権があるっていうことを知りました」

水島「うん」

エズズ「それで、私は事前準備に時間がかかるから、是非、アポイントメントを取りたいですって、無理矢理、押し進めて、申請してからも、全部、準備して5年後に取ったんですね」

水島「うん」

エズズ「しかも日本語のN1の資格を出したんですよ。私は日本語能力試験のN1を持っているんですけど出して、日本語の試験がありました。かなりレベルが高い試験でした。考えながら書かないと、結構、難しい問題だったので、その当時は、ああ、こういうちゃんとした水準があるんだなって思ったんですね。

今は日本語が解らなくても日本語の試験無しで、中国人が日本国籍を取ったって、ネットで見せびらかして自慢しているぐらいの事態になっているので、何処までするつもり？日本語が解らなくても生活出来ちゃうっていうこと自体、国の中に国が創られているっていう意味なので、まず凄く危険。だから熱海の問題も出て来ちゃうじゃないですか。

あれだけ池袋で日本語に困らず生活が出来ました。でも選挙に出たい。そこの市長になって、そこで自分の主張を通したいということなので、じゃあ、バックに誰が居るんだ。誰が資金を提供しているんだ。じゃあ、そこに行って堂々とそこに家を買って立候補して、自分の参政権を主張するっていうのは、この国の法整備とか外国人移民問題とか言う前に、ちゃんと新しい日本人をつくるんだったら、先程、アメリカの方でも教えて戴いたように、まずアメリカ人になって貰うのが基本前提で、そこで地域から限定して何万人単位で入れて、教育しながらアメリカの社会の一部になって行くっていうプロセスが無い

まま、何も無しで、お金を投資しました。家を買いました。色んな所、島まで買って人口7人しか居ないところで物件を買って、帰化出来ちゃったら、じゃあ、その住民になって、その7人のトップになっちゃうじゃないですか。

それ程、恐ろしい事がこの国の中で法整備無しで進められているということが、もうイリハム先生がおっしゃったように非常に危険なことなので、じゃあ、ここまでになるまでには黙っていて…、今度、大きな問題が起きた時に、じゃあ、今迄、何をしていたんですかみたいな感じになってしまうので、本当に…」

水島「うん、その通りだよ」

エズズ「はい。本当に危険だなあっていうのを見ながら、3年前に水島先生がおっしゃった様に3年後って言ったなら3年後、日本に居るかもしれないっていう危機感を持たれておられましたので正に、その状況ですよ」

水島「もう、来ているっていうね。う～ん」

エズズ「はい。そうですね」

水島「まあ、そういうことですね。ダイチンさん、先程、原則の話をしてくださいけどもね、民主主義の在り方。この今のお二人の意見を聞いてどうですか」

ダイチン「そうですね。でも日本っていう外国人問題で、私達も元々外国人であって、日本に来て帰化して、今、日本国民として生活している訳ですので、やっぱり、この元外国人として、日本での外国人問題をどういう風に見るかっていう問題というのは、何か気持ちとしては凄く複雑でありますね。ただ一つだけ、やっぱり、この日本の法律の整備は未だ整えられていない。ルールっていうのね」

水島「うん」

ダイチン「例えば、今、技能実習生、日本の少子化によって、やっぱり外国から労働力を入れないといけないっていうのは、自民党政権、何年前からも1千万人の移民政策とかということも言っていたんですね」

水島「未だ言っていますよ。うん」

ダイチン「うん、未だ言っていると思うけど（失笑）、ただ、その移民を入れるのは、政府で計画的に入れるのは勿論、日本の経済発展のことを考えるといいことだと思います。ただ、それをどういう風にちゃんと計画して、例えば一つの国、中国からだけ入れるか、或いは、東南アジアを中心にして、まあ、世界中から、あちこちから計画的に入れるかって、色んなやり方があるんですね。

ただ、今、見ると、勿論、技能実習生だけのことではないですね。ご存じの通り、世界中でも、みんなが知っている通り、アメリカでも大量の不法移民が入って来ていた。前トランプ政権によって、これが止められているっていうのはあったんですけど、バイデン政権の時は凄く大量に入っていたんですね。それは中国がそれを利用して、当時の中国人がいっぱい入って行った。それはネットで調べてみると、事実であることがよく分かる。

それが日本にも流れて来ているっていうのが今の状況ですね。中国で言うと、ルンって、よく言っているんじゃないですか。日本に来ることをルンニチ（来日）っていう言葉まで

作って入って来ている。それは色々な立場で、例えば一番、多く見られるのは投資ビザですね。日本では500万円を投資すれば、もう日本のビザが取れるっていうのは普通ですね。今の中国の金持ちっていうんじゃなくて、普通の、ちょっと金がある人にとって500万というのは、本当に簡単に出来るものだから、そういう人達が大量に入って来る、そういう人達っていうのは日本を好きだからって来ている訳ではないですね」

水島「うん」

ダイチン「私達は、それを解らないといけない。日本に来る理由を聞くと、また違って、例えば留学生は日本を好きになっていた。日本で働きたいっていう思いがあって、それは間違いない。ただ、今の投資ビザで入って来ている人っていうのは、日本を好きになって入って来ているんじゃなくて、日本のルールのいい事を使いたい。例えば医療制度とか、日本という安全で平和な所で暮らしたい。ゆっくりと老後を過ごしたいという、色々な理由で入って来ている」

水島「うん」

ダイチン「そういう人達っていうのは、正に日本語が解らない」

水島「うん」

ダイチン「それで入って来て自分達のコミュニティをつくって、そこで、勿論、金があるから自分達の生活をしていくんですね」

水島「うん」

ダイチン「何も困ることは無い。日本の社会の中でそういう違うコミュニティをつくっていくっていうのが多分、これからの一番、大きな問題になるんじゃないかと心配しているところです」

水島「そうですね」

ダイチン「はい」

水島「現実的にそういう問題が、もう起きていますよね」

ダイチン「うん」

水島「それと、先程、モーガンさんが最初に言ってくれたことで、日本は本当の完全な主権国家じゃないというね、アメリカ・ファーストの国でやって来た。それから皆さんが言ってくれた日本の良いところ。ちゃんとルールとかね、郷に入れば郷に従うっていうような言い方をするんですけど、こういうものをちゃんと守って貰う。守らせようとする姿勢が無くなって、もっと言うと、そういう道徳的とか道義的なことが、はっきり言うと日本の戦後の国民の中に失われつつある。

それで『今だけ、金だけ、自分だけ』みたいなのがあって、外国人、何だかとか言えるような類いじゃなくて、自分だけ良けりゃあいい、金がありゃいいね、こういうものやっていると、当然、さっきイリハムさんが言ったゴミの分別とかね、みんなに迷惑をかけないとか、こういった極普通の庶民レベルの道徳みたいなものが全く駄目になって来ている。

もっと言えば、人が沢山になって来ると、川口がそうだったんだけども、やっぱり中国の人がマンションを占領してしまう。これは有名な話だけど、結局、踊り場に糞尿をまき散らして、窓からどんどん物を落として、段々みんなが嫌になって日本人が去って行く。

そこに中国の人が入って来て、そのマンションに、みんな、中国人が住みたいだね。そうすると収まる。だから、これは本当に解決した話じゃないんですよね。こういったことが現実的にあって、ただ我々が今、イリハムさんが言われたことは、そういった規範とかが、ちゃんと日本のルールだよと、日本人はこうやっているんだよっていうことを伝えないし、教えないし、それから自分の中で無くなっている。

まあ、変な言い方をすると、中国人の悪口を言う訳じゃないけれども、彼らと同じような類いの『今だけ、金だけ、自分だけ』みたいなね、今、ダイチンさんが言ったように、投資に来る連中と日本に居る連中が、みんな、同じになって来ている。だから、いくらでも、ちょっと金が良けりゃあ、直ぐ土地を売っちゃう。というようなことが、実は北海道や東京や大阪でもね、あの京都の有名な先斗町の周辺だって全部、買われている。お土産店が、みんな、中国人の経営する所有になっているっていうね。こういうのを見るとね、我々のルールというものの自体が、本当に戦後の日本人の中から失われつつある。ただ田舎に行ったりすると、庶民の中には未だそういうものが残っている人達も結構、多いというね。はい、モーガンさん、どうぞ」

モーガン「あ、すみません。皆様のお話を拝聴して思ったんですけども、結局、この全ては魂の問題じゃないかと思いました。ハート問題です。この80年間、日本人の魂が奪われた。だから誰が日本を好きか、そして、好きじゃないかを見極めることが出来ないじゃないかと思って、日本という国は神国で、シロシメスって言葉が使われているじゃないですか。それは日本人が移民じゃないので、神々の国ですから、日本人も、この国を大切にしなければならないっていう意識があるじゃないかと、私は思っています」

水島「そうですよ」

モーガン「やっぱり外国人でも誰でも共同体の中に入って、自然にやり方を覚える。でも、それが無ければ、どうすればいいか分からないので、この日本の価値が解らない。ただの外国だと思って、デタラメにゴミをポイっと捨てるとか、そういった人は自然に出て来ると思うんですけども、日本が好きって、どっちの日本が好きなのか、私は知りたい。

弱い日本が好きか、ちゃんとした主権国家としての強い日本が好きか、どっちかを見極めるべきだと思います。先程、イリハム先生のお話を聞いて思ったんですけども、私は、二度、育てられた訳です。まず母に育てられました。私が、ちびっ子モーガンとして、あのチンパンジーだった私は母に育てられました。それで日本にやって来て、もう一度、ゼロ歳から再出発しなければならなかった訳です。ゴミ分別、私も反発しましたよ」

水島「うん」

モーガン「ゴミを洗っている自分が何をやっているのかと。人生で初めてゴミを洗っている」

一同「(笑)」

モーガン「ゴミを洗っている、これは何だろうと」

一同「(笑)」

モーガン「もう、こんな暇は無いと思って反発しましたよ。でも周りの人々に教えて戴いたので、これを、ちゃんと分別しないと、環境も守られていないし、他の人が困るので、責任をもって行動しないと駄目で、そういうルールを外国人として日本人から教えて戴いた訳ですよ。それは永遠に一生、日本人に心から感謝しますよ。私は、この国で人間になりましたと思います。でも、それは相当、時間がかかったし、ただ日本を好きとかアニメが好きとかとやって来て、じゃあ、日本に住みたい。日本語も話せないままで帰化出来るって、それは本当に危険です」

水島「うん」

モーガン「何の勉強もしないで何のコミットメントもしないで、ただ現れただけで外国人のままで、じゃあ、日本人になりたいって、それは私のような外国人としては困るんです。そういう人は直ぐ国に帰って欲しい。先程、おっしゃった通り、この80年間、日本人は、もしかしたら日本人としての自信を失って、それは駄目だよっていう、当然な事を言う自信も無くなったし、外国人がとんでもないことするのを見ても、ちょっと、やめてくれと言う自信も無くなったんじゃないかと思っています。

先程、エルドリッチ先生もおっしゃったし、イリハム先生もおっしゃったんですけれども、やめてくれと言って欲しいんですよ。しっかりと躰をして欲しいです。それは駄目ですよと、ちゃんとルールを守らないなら、じゃあ、国に帰れといった主権を持った日本を望みたいと思います」

水島「はい、そうですね。今、丁度、石平さんが来られました。まず、石平さん、おめでとうございます」

石平「あ、どうも有難うございます」

イリハム「おめでとうございます」

石平「有難うございます」

水島「本当に良かったと思います。それで、まあ、急に、こっちの話になっちゃうんだけどね」

石平「うん」

水島「石平さんが帰化した時、私に話してくれたことで覚えているのは、何か意外と簡単なんですよ。何かマンションのひとつでも買うように書類を揃えたらね、すう〜っと通って帰化しちゃって、えっ、だって何も誓わなくてもいいのということでビックリしたと。あの帰化した時に言っていたことを思い出すんだけど、今、その話も出ていてね」

石平「うん」

水島「石平さんは日本についての色々な知識も何もあったけども、そうじゃなくても、帰化するということがスツと行っちゃうのかっていう感じがあった訳だよ」

石平「うん」

水島「だから、この今の日本の帰化制度という問題について、他のこともあるんだけど、

まず、見解を聞かせて貰いたいなあと」

石平「まず、お詫び致します。本来ならば開始から皆様と一緒に、この番組に出るつもりだったんですけども、今日は党の上院議員総会が4時から始まって終わったのが7時になってしまいました（苦笑）」

水島「結構、長くやっていたんですね」

石平「そうですよ。まあまあ、結構、我が党は真剣に政治をやっていますから（笑）」

水島「ああ、そうか、維新がね、はい」

石平「まあ、それで大変、遅れましたことをお詫び致します」

水島「はい」

石平「じゃあ、今の帰化問題ですが、まず、私が帰化人の体験者でありまして、私の体験からすれば、今の日本の帰化制度は正直、緩いというか、とんでもないです」

水島「うん」

石平「それでいいかって、まあ、いいかじゃなくて、あつてはならないということです。私の体験からしても、まずね、審査に当たって思想信条、要するに外国人が日本国民になるでしょ、じゃあ、日本に対してどういう考えを持つのか、或いは、どういう感情を持っているのか、或いは、日本が好きか嫌い、或いは、日本に対して愛着心があるかどうか、或いは日本の基本的な歴史伝統、日本の天皇陛下を中心とした国の形に対して、どれ程の理解があるのか、一切、問わないんです」

水島「ねえ、それ、凄いよね」

石平「一切、問わないです。審査に当たって問われるのは、前科があるかとか、それは、当然ですけど、あと、ちゃんとした生活基盤があるかどうか。或いは前提条件として日本で連続5年以上、生活しているということだけです」

水島「うんうん」

石平「逆に言えば、要するに日本で連続5年、生活して、一定の収入があつて、前科さえなければ、どんな奴でも日本人になっちゃう」

水島「なるほどね」

石平「反日分子であっても、なっちゃうんですよね」

水島「例えば、石平さんは、ものを書いたり色々やっていたじゃないですか、そういうのは考慮された形跡が無いんですか」

石平「それは全く無いんですわ」

水島「ないの。おお～」

石平「それは、もう不問」

水島「それだけ、多分…」

石平「勿論、審査団は、私が何をやっている人かご存じかどうか、私には判らない」

水島「うん」

石平「とにかく、この審査の場面では、そういうものが一切、問われないんですわな」

水島「なるほどね」

石平「更に、それで審査に通って合格した。それで法務局から電話があつて、もう許可が下りたよ、法務局に来て下さい」

水島「うんうん」

石平「それで有頂天になってウキウキして行ったんですわな。それで行って案内されたのは、殺風景な狭い部屋の一つでした。まあ、部屋の大きさは別にどうでもいいよ。問題は、そういう時は日本の国旗の一つを飾るべきでしょ」

水島「うん」

石平「更に、もし天皇陛下のね、何…」

水島「お写真ね」

石平「うんうん、お写真があるべきなのね。そんなもの一切、無いんです。それで審査官が出て来て、書類をいくつか出して、5分間の説明で、はい、日本国民になりましたって」

水島「(笑)」

石平「あれねえ、クレジットカードを申請するのも、それ以上、時間かかるんじゃないかよ」

水島「ああ、時間がかかるね」

石平「なあ、あれは腰が抜けるんですよ」

水島「(笑)」

石平「僕は、これで日本国民になれたか」

水島「う～ん」

石平「だから、やっぱり、それでは自分が納得できないですわな。丁度、11月に、これで許可が下りて、手続き上は、日本国民になったんですけど、やっぱり、自分なりに納得できないから、翌年のお正月にね、自分は関西ですから伊勢神宮へお参りしに行つて、要するにね、自分は日本国民になったっていうことを、天照大神にご報告して、初めて人生で一番、大事な通過儀礼ですわな」

水島「そうだよねえ」

石平「成人になれば成人式ぐらいするでしょ。あれねえ、日本の今の体制は、日本人自身が日本の国籍の重みを何とも思っていないやなあ」

水島「いやいや、その通りでね。今の陛下のお写真があるかどうかは別として、ただ儀式とか、そういうことを、我々は凄く大事にして来たじゃないですか。正月から何からね」

石平「全く無いですわ。確かにアメリカでも外国人がアメリカ国籍になった場合、宣誓式があるでしょ」

水島「ええ。ねえ」

モーガン「帰化すると宣誓すると」

石平「そうそう、そうでしょ。日本はそれが無いです」

水島「だからねえ、そういう意味で、折々でみんなが儀式とかね、そういう形式の…」

イリハム「あれ、だって宣誓書にサインしたでしょ。あれ、最高だよ」

石平「何が宣誓書に」

イリハム「私は日本の法律を守って、良好な国民になる、おわり」

石平「それだけでしょう。それでおわり」

イリハム「それでサイン（笑）」

石平「いや、法律を守ることは最低限ですよ」

水島「だから、それは、おめでたいことでもあるしね」

石平「ああ」

水島「やっぱり、ある意味で儀式っていうのは大切だと思うんだよね」

石平「儀式は大切ですよ」

水島「うん。だから、さっき自分で伊勢神宮、行ったって言ったけど、その儀式は本当に何か荘重な感じでね、ああ、行って良かったなと」

石平「うん。そうですよ」

水島「その審査官でもね、賞状でも何か判んないけどねえ、日の丸があつたり、何かするようにね、でも、チョロチョロでしょ（笑）」

イリハム「私が日本人になったって凄く感じたのは、荒木和博先生がみんなを集めて講演会をさせてイリハムが日本人に帰化しましたとおっしゃって、その場で日本国旗を一つ、私に下さった時ですよ」

水島「ああ、それは、いいことだねえ」

イリハム「それで、その日に、私は、ああ、確実に日本人になったって（笑）」

水島「まあねえ。エズズさんはどうでした。そんな風になっていた？」

エズズ「私も1月1日に皇居に行って、皆さんと並んで日本国旗を振って…」

水島「ああ～、一般参賀」

エズズ「はい。一般参賀に参加出来た時に、ああ、私は、ちょっと一日本人として新参者として…」

水島「うん、それでね、有難うねって感じだね」

エズズ「はい。凄く誇らしく思いました」

水島「ただ、やっぱり手続きはチャラチャラチャラの」

エズズ「まあ、そうですね、やっぱり殺風景な所で、本当に日本語が解らない人達も居る中で、法律を守らないと、この国籍は剥奪されますよってということが、私に強く響いたので、その日はサインして出て来ました」

水島「なるほどねえ」

エズズ「はい」

水島「なんかねえ、だから、これが、さっき出たルールを守らせる側に、そういうものがないと、やっぱりねえ、う～ん、やっぱり、そういう意味では、もう、これだけでいいんだ、みたいになっちゃうよね」

石平「じゃあ、法律を守るのは当たり前のこと、日本国籍に帰化した、でも、法律を守るべきですわな」

水島「そうですね」

石平「だから、日本国籍に帰化するって、要するに、日本という民族共同体に入ることだよ。日本人は長い歴史の中で築き上げて来た、この文化の中、この価値観の中に自分が入ることが帰化です。本来の帰化の意味はそれですよ」

水島「う～ん。帰化した人の方が、日本の事を解っているっていうね（失笑）」

石平「そうそう、そう」

水島「矛盾が出ているかも分からない。エルドリッチさん」

エルドリッチ「はい」

水島「今、そういう帰化のえらい簡単で簡略な形式とか、儀式とかいうものの大事さっていう話がでましたが、実は日本はお正月の始めから色んな儀式、お盆とかそういうことをやってきた国だったんですけど、本当に合理的なっていうか簡素というかね、こういうものがあるんですけど、お聞きになって、どういう感じがしましたか。日本人自体に、そういう日本というものが無くなって来ているというね」

エルドリッチ「(頷く)」

水島「その証拠だっというような気もするんですけどね」

エルドリッチ「そうですね。スタジオに居れば、もっと議論に参加したいと思っているので…」

一同「(笑)」

エルドリッチ「石平さんの顔を生で見たいと思っています」

一同「(笑)」

エルドリッチ「今日、石平さんから新しい本が届きましたので有難うございます。多分、水島社長の前に置かれていると思うんですけど」

水島「アップを撮れるかな。はい」

石平「うん。はい、そうです。うんうん」

エルドリッチ「はい、有難うございました」

石平「いや、どうも、こちらこそ」

エルドリッチ「まあ、色んな話があったんですけども、私の今、住んでいる家は、この地域に25年前から住んでいます。石平さんが何回も家に来て下さって」

石平「そうですね。お邪魔しました」

エルドリッチ「忘年会をやったり、近所迷惑をしたりしてきましたけど(笑)」

石平「いや、していません、していません、していません(笑)」

エルドリッチ「一色さんと西村眞悟先生とか、ヒカル君とか…」

石平「そうそう、そうそう。そうです、そうです」

エルドリッチ「はい、非常に楽しい時間を過ごしましたがけど、その翌日、翌週とかの元日ははじめ色んな祭日には、家では日本の国旗を掲揚している」

石平「うん」

エルドリッチ「私の家の周辺には、国旗を掲揚している家庭が殆ど無い」

石平「ああ～」

水島「そうですね。それ、解ります」

エルドリッチ「やはり、それは物凄く寂しい。10年前、20年前は、もっと、あったと思うんですけども、多分、一部の人達は家の前を通ったら、まあ、いいなあと凄く喜んでいる方も居ると思うんですけども、逆に右翼だと思われるけども、どうやって外国人が右翼になっているか分からないんですけど(笑)」

一同「(笑)」

エルドリッチ「でも、私が掲揚していることは、私として日本に滞在させて戴いているという感謝だと」

石平「ああ、なるほどねえ」

エルドリッチ「はい。そして尊敬」

水島「うん」

エルドリッチ「日本の歴史、伝統、文化に対する尊敬、或いは、日本人から大切にすべきことを、代わりにさせて載いているという気持ちでやっています」

水島「うん、うん」

エルドリッチ「あと、さっきダイチンさんがお話されていた今の政府の外国人、特に技能実習生とか労働者を、あまり理解できない形で受け入れている。ある種の計画でやっているけれども、いい計画じゃないと思っています」

水島「うん」

エルドリッチ「はい。何故なら、私は、日本の人口減少が確かに進んでいるんですけども、この人手不足問題があると、私は思っていない」

石平「うん。うんうん」

エルドリッチ「むしろ問題なのは日本の経済が、あまりにも非効率的であることです」

水島「うん」

エルドリッチ「だから経済がより効率的になったら、そして日本の社会からドロップアウトされている引きこもりの方々、或いは、希望を失って、夢を失った、例えば、自殺された方々、或いは、日本の今の社会に夢を実現する為、大活躍出来なくなった人達を、もっと活用して欲しい。或いは、兼業、副業することによって、より経済が活性化する。それをやった上で、もし、それでも足りないなら、海外から労働者を入れてもいいんですけども、これをやらないで無条件に外国人達を受け入れることは非常に問題があると思っています」

水島「全く、そうだね」

エルドリッチ「ダイチンさんからお話がありましたように、例えば、中国人の一部、或いは多くの中国人達が日本のサービスを受けたいから入っている」

水島「うん」

エルドリッチ「つまり日本を利用したいからやっている。それに対して多くの外国人達は日本が好きで貢献したい」

水島「うん」

エルドリッチ「うん。だから私は日本政府がもっと選定すべきで、日本の為に本当に頑張ってくれる外国人のみを受け入れたらいいと思う」

水島「うん」

エルドリッチ「そういう風に思っています。そこで他の問題が出て来たんですけども、例えば、参政権の問題。以前の番組でも申し上げていたんですけども、私は外国人達に参政権を与えては絶対に駄目だと思います」

水島「うん」

エルドリッチ「多分、理由は想像出来るんですけども、この日本の選挙制度が基本的に三段階にあると、私は見えています。地方政治、都道府県、そして国政」

水島「はい」

エルドリッチ「ある地域、地方の方で、ある民族が固まったら自分寄りの候補を立てて、少しずつ国政まで影響を与える。この外国の立場を代弁するのではなく、日本を代表しなければならない」

水島「うん」

エルドリッチ「だから外国人には絶対に参政権を与えてはいけない」

水島「うん」

エルドリッチ「一部の日本人は、いや、でも税金を払っているとか、或いは、地方なら、大丈夫でしょうって言っていますけれども、日本に居る外国人として、私は全く不自由がない」

水島「うん」

エルドリッチ「何か言いたいことがあったら、文句があったら近くの役場に行ってお話しが出来る。或いは、その地元の議員の方と相談する、或いは新聞に投稿する」

水島「うん」

エルドリッチ「或いは、行政と民間が創った委員会に於いて発言する」

水島「うん」

エルドリッチ「いくらでも意見を伝える手段があるので、態々参政権を与える必要が無いと思っています」

水島「はい」

エルドリッチ「或いは、一部の日本人が、もしかすると、いや、でも共生社会を目指すべきじゃないですかと言うけれども、日本人が日本に居る外国人達に合わせる必要がない」

石平「そうそう、そういうことですわな」

エルドリッチ「外国人達が日本人、日本の社会に合わせるべきだと思っています。そこで、この番組に向けて『共生』という言葉について色々考えていたんですけども、恐らく三段階の共生があると思う」

水島「うん」

エルドリッチ「国際社会に於ける国家間の共生があると思う。その場合の理念の全ては、法治国家で、ある種の尊厳がある。立場がある。国際社会の中では一応、法的には平等である。なので、平等者同士の共生をしないと無秩序になる。それが一つの共生。

二つ目は、同じ国内で同じ権利の有る方々同士の共生で、この場合は、日本に於ける日本国籍を持つ日本人同士の共生。価値観、考え方が違って一緒に生活しないといけない」

水島「うん」

エルドリッチ「三つ目の共生ですが、私はこれが間違っていると思う。つまり、外国人と共生しないといけない。でも同じ立場じゃないから…」

水島「うん」

エルドリッチ「日本に於いて私達には日本人と同じ権利が無いし、あってはならないと思う」

水島「うん」

エルドリッチ「なので、日本人が外国人に合わせるんじゃなくて、外国人達が日本の社会の中心である日本人に合わせるべきだと思っています。以上です」

水島「はい、有難う。非常に解り易いと思います。それで、ちょっと筋だけ言っておきますけど、今、エルドリッチさんが言ってくれたように、もう全部、捨てちゃって引き籠りになっている日本人が70万人とか80万人という状態です。それから毎年、ずう〜っと続いていますけど、日本では毎年3万人ずつが自殺で死んでいます」

エルドリッチ「(頷く)」

水島「若い人だけじゃないですけども、毎年3万人が減っていくっていうのは、10年経ったら30万人と言うような状態で、これは決して全員が幸せな国じゃないっていうか、こういうことも我々はやらなきゃいけないと思います。それは、今言った人手不足というよりも、本当に、こういう人達が生きたいと思っているのに生きられないと思って死ぬ訳ですよ。ということを含めると、私達の社会は戦後80年、昭和から100年って言われていますけども、この時代の我々の国がどういう国になっているかっていうのを、もっと日本人自体、この皆さんみたいな方がちゃんと言ってくると非常に解り易いっていうかね、解らない人達が本当に多いです。これでいいんだっていうね、これしか無いと思っている。

でも外国で、まあ、外国人、或いは、外国に住んでいた人達が、日本について、こういう風に言うのは非常にいいと思います。それと、さっき言ったように、排外主義的な人は本当に1割ぐらいは居るかも分からないけども、殆ど日本には居ないんですね。

それと、もう一つは、やはり政治が非常に貧困だっていうの、ここで言うと、先程、エルドリッチさんが言ってくれた国家間の共生。或いは、国内の日本人同士の共生。それから、もう一つ、最後に外国人との共生って言うけど、当たり前日本人の常識ですけど、日本人同士だって、そんなにね、いつも仲良くね、或いは、夫婦でも親子でも、きょうだいでも、友達同士だって、そんなねえ、簡単にお花畑で、いつもニコニコ、手を取り合って笑いあっているなんていうことは無いです。

殆ど理解し合えない。難しいけども愛し合って何とか暮らしていくっていうのが、普通の人間理解だだと思います。まして、それが価値観も習慣も違う、宗教も全部、違う人達が、同じように共同体の中で生きるっていうのは難しいっていうことを前提にしなきゃいけない」

モーガン「あのう、私も多文化共生とかは非常に危険を感じるんですよ。何故かと言う

と、表面的に、みんな、仲良くしましよって、それはいい事じゃないですか。でも白人の常套手段ですけど、そういうことを唱えながら、大量の移民を入れて、結局、グローバリズムが、その国を支配するじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「それで、みんな、仲良くしましよって」

水島「うん」

モーガン「もう当然、仲良く出来ない人々を一緒に入れて、喧嘩になっちゃうじゃないですか。何がやりたいかって言うと、みんなが仲良くする社会を本当に目指しているのではなくて、分断政治とかLGBTもそうですけど、日本人は馬鹿じゃないですし、色んな人が居ると判っているので、そういった法律が全く必要ない。

今迄、千年以上、日本人が自分の社会を築いて来て、色んな人が居るのが当然なことで、誰もが差別している訳でもないですけども、そういった人を守っているという綺麗なことを言いながら、それを隠れ蓑に使って、本当は分断政治をしようとする。今の移民問題も全くそうだと思います」

水島「いや、そうですね」

モーガン「馬淵先生がおっしゃっていることですけども、人手が不足しているって、それは政府が態々つくった問題じゃないかと」

水島「うん」

モーガン「本当にエルドリッチさんがおっしゃった通り、日本人が足りない訳は無いと思いますよ」

水島「その通りですね」

モーガン「それは政府が態とつくって、外国人が沢山必要だねえって、それを口実に使って、多数の人々が大量に入って来て、結局、この日本の社会をぶっ壊す事が目的」

水島「うん」

モーガン「グローバリズムが、もっと、このグローバリストが、この社会を支配できるように。私達は、あとで入って来た外国人ですけども、本当に日本を愛している人は、そういうことを見て、多分、違和感を覚えていると思います。私達は日本を愛しています。日本人を支えたい」

水島「うん」

モーガン「この国を築いてきた先人様に対して、私は本当に尊敬を表したいと思っていて、この自分では出来ない、時刻表通りに電車が来る。そういった国は、アメリカ人とは、つくったことが無い」

水島「まあ、それは、そうですね」

モーガン「向こうでつくれない。日本人が自然に、そういうことが出来るって凄いと思っ

入って来て、国をぶっ壊して、私達も困るし、悲しいし」

水島「そうですね」

モーガン「本当にどういう理由で、どういう動機で人々が動いているかと、もうちょっと見究める能力を身につけた方がいいかなあと思っています」

石平「モーガンさんから、そういうお話があるのは非常に大事なポイントがありまして、例えば電車が定刻に来ると言っ、それねえ、小さい話かもしれませんが、しかし背後には日本人が長い間につくり上げた一種の文化があるんですわ」

モーガン「そうなんです」

石平「この文化があるからこそ、電車もちゃんと来るしね、誰もゴミ一つ捨てない。女性が平気で夜の道も歩ける。それがねえ、日本にとって、日本人にとって大変な財産ですよ。そうですね。しかも日本人の先人達が長い歴史の中で築き上げた無形の財産です」

モーガン「そうですね」

石平「日本という社会の強みもここにあるんです」

水島「その通りだね」

石平「日本の社会、昔から日本の企業の終身雇用制とかね、終身雇用制は簡単に出来る訳じゃないね」

水島「難しいでしょうね」

石平「一種の倫理、信頼関係の文化の中で成り立つことであって、しかし問題はそういう無形の日本の素晴らしさというものは、もし大量に移民が入って来て、そういう者に合わせる、エルドリッチさんがおっしゃったように合わせるなら未だいいですよ。まず多くの移民達が日本のそういうものを受け入れない。むしろ、自分達の行動的文化をそのまま日本に持ち込む」

水島「うん」

石平「自分達の社会を創り上げる。いや、それが、また、いいですって言うけど、更に、一歩進んで自分達のを日本社会に押し付けるってことはね、日本人の先人達が、千年、二千年の歴史の中で作り上げた、そういうものを、逆に外部のそういう衝撃で壊れてしまう危険性が充分、あるんです」

水島「そうだよね」

石平「一旦、壊れてしまったら、もう取り返しがつかないですから、その深刻さはね、一部の在外人が安易に安い労働力を取り入れて、そんな安易なことで一々出来る、それが多少の経済合理性があるとしても一部の経済の便宜性の為に日本人が2千年間、3千年間、或いは、作り上げたものを壊すのはね、あつてはならないということですよ」

モーガン「はい。はい」

石平「私もそう思います」

モーガン「おっしゃる通りです」

水島「それはね、本当にその通りでね」

石平「うん」

水島「この問題がね、例えば具体的なことを言うと、和歌山へ行きましたけど、梅干しの名産地ですね。梅の実の収穫は本当に1週間が勝負で、ばあ〜っと梅が咲いて、梅の実が最高に香りが良くていい時の1週間となると、その梅畑を持っていると、人を雇わなきゃいけない。ところが集まらないですよ。だから外国の人を揃えてやらなきゃいけない。昔は、その村で、今日は石平家、今日は水島家」

石平「ああ〜なるほど、なるほど。ああ」

水島「今日はモーガン家っていう風に、村の人が、その山で梅を一斉に採ってという風にやっていたけど、それが、もうバラバラにされちゃったからというようなことで、だから外国人が一番、手軽にやると。但し、それは繋がりが無い単なる労働力だから、終わったら金を払って消えてくれって。そういう話になっちゃっている。だからね、今迄の共同体の人間として扱われた、それを日本人も外国人も全然、単なる労働力、コスト、お金に替えられるものでしかないみたいな物凄く冷たい社会に、やっぱり日本がなっているっていうことは凄くあると思います。

それとね、もう一つ、これは今日、取り上げたんですけど、今、問題になっているパレスチナの話です。この写真はアミールという痩せ細った裸足の少年。炎天下12キロ歩いて、ほんの一握りの米とレンズ豆を受け取りに来た。彼は、私の手に口づけして、はい、この写真を見ると、やっていますね。有難うと言った数分後、イスラエル軍が発砲して、この少年アミールは即死したという。今、これが広がっているんですけど、こういうことが行われている。

つまり、こういうことをする人達も居るということです。いや、いいとか悪いとか、私から言えば、悪いですよ。とんでもない話だけでも、こういう異民族とか他人種とか、或いは、宗教が違う、異教徒はこうやってもいいという教えで実践してしまう人も居る。石平さんは昔、中国に居た時、天安門事件の経験者で、つまり意見が違う奴は、みんな、殺しちゃってもいいみたいなね、これ、そっくりですよ。

異教徒、或いは反革命分子みたいに言って、そういう人は殺してしまうみたいなね、こういう人達も未だ実際に居るし、ウイグルの人達もそういう目に遭っている」

石平「そうですよ。今、中国共産党政権はジェノサイドを肯定的にやっているから」

水島「まあ、南モンゴルもそうだし、そういうことがある、これは、つい数日前ですよ。写真を撮っちゃったんだね。だから、こういう子の顔を見ると、ああ、あと何十年、生きられたかね。とにかく、それを今、ウイグルでも行われているっていうようなことを、こういう人達も居るということを、我々日本人がね、こういうのを無視するんですよ。みんな、今、見たくない。ウイグルの問題についても色々言うとね、まあ、そういうのがあるかもしれないけどね、というような形が結構、多いんですよ」

モーガン「でも戦前の日本人はそうじゃなかったです」

水島「そうだよね」

モーガン「私はそう言いたいです。その魂が奪われたんですよ」

水島「そうですよ。だから…」

モーガン「戦前の日本人が動いて、人が苦しんでいるのを無視するじゃなくて、動いて、その人々を助けようとした、それが今、アジアで必要だと思います」

水島「それがそうですよ。だからねえ、今言ったように天の下、一家となす」

モーガン「はい」

水島「つまり日本の考え方の基本は天（あめ）の、天の下に各民族が、きょうだいの様に生きて行くという、そういうことでね。それと、もうひとつは日本に影響を与えた法華経で言うと、宮沢賢治っていう有名な詩人で小説家が居るんですけど、この人が言ったのは一人でも不幸な人が居たら、自分は幸せになるまいという決意。これは法華経の教えですけどね、そういうようなことのものが、実際、戦前は結構、法華経の影響が強い日蓮宗の影響が強い人が多かったんですよ。

やはり、それが大アジア主義とか色んなものが支えていたのも多かった。だから、それがいいって言っているんじゃないけども、今言ったように世界中の民族が、みんな、家族の様に喧嘩もするし、いがみ合うとかもするけども、お互いにきょうだい同士が殺し合わないみたいなのと同じようになっていく感じの『八紘一宇』というものが、その大東亜戦争の一種の中心的な思想だった。

だから、それが現実にどうだったかっていうのは色々言う人が居ますけども、ただ、こういうもの自体を日本人はずっと教育で教えられて来たし、教育勅語とかね。だから、色んなもので本当はそういう風にあるべきだし、庶民は未だ意外と外国人に対しても親切だとかね、そんな差別的な事は、あまりしないと思うんだよねえ、していないと思うんですけど」

石平「私もそう思いますよ。例えば私自身も日本国籍に帰化する以前が随分、長く外国人として日本で生活していたんですわな。私の体験からすれば、正直言って日本って普通の日本人から差別を受けた覚えが無いんですわな」

水島「まあ、石平さんの性格もあるけどね（笑）」

石平「最初、日本語も解らなかった時、大阪、曾根崎、梅田の辺にある地下1階の居酒屋のお皿の洗い場でさあ、5時から10時まで、ずっと皿洗いなんですわな」

水島「ああ～」

石平「要するに地下1階の厨房で、働くのは正直、普通の大阪のおっさんばかりやなあ。別に学歴がある訳でもない。しかし、みんな、善い人ばかりですわ」

水島「うん」

石平「同じバイトでも、むしろ日本の方が厳しく叱られるんですわな」

水島「う～ん」

石平「私は性格が多少いいかもしれませんが、怒られた覚えも無いしなあ」

水島「うん、真面目に働いているから（笑）」

石平「その流れの中で、その生活の中で、じゃあ、何が言いたいかとなると、結局、今、外国人問題を色々と議論されているでしょ」

水島「うん」

石平「私が思うになあ、外国人問題は大半、日本人が作り出した問題ではなくて、正に外国人が作り出した問題の側面が結構、大きいですわね。はっきりと言って、私もかつて外国人ですわね。ちゃんと日本社会の中に溶け込んで、日本のルール、日本の暗黙の色んなことを、ちゃんと守るならば、別に問題が起こるはずがないんです。だから今、そういう問題が起きていることで、じゃあ、どうするかっていうことですか」

水島「そういうことですねえ」

エズズ「私も考えたんですけど、最初に来た時、一番、思いやりと理解者として接してくれたのは日本人ですよ」

水島「うん」

エズズ「だから日本に来て生活して沢山のの方々のお世話になりながら、やっと日本の社会の一員になれるぐらいに育って、人間として成長する訳ですね。だから、そこから見ると日本国民自体は、そんなに排外主義者ではないですよ」

水島「うん」

エズズ「何が起きたかと言うと、やっぱり一部の原因を作ってしまったのは、外国人自身です。そこに慣れるまでの間のミスや言葉の理解力とかと思われる、お互い感じる差。こっちは差別的に捉える。でも、実は、相手の日本人は良からうと思って説明してくれたり、強く叱って、ちゃんと直してあげるといった思いやりの気持ちでやってくれたりとか、そういうのがあるんですけど、でも、その溝を、もっともっと大きくしてしまったのは、私の考えで言うと、政治的な政策のミスだと思います。何故かと言うと、そこまで成長するのに時間がかかる、プロセスがある日本社会を受け入れる包容力以上に、人を受け入れちゃって態と増やしてしまっ、尚且つ地域限定ではなくて、親日国家ではなくて反日国家の人達ばかり入れてしまうから…」

水島「そうだよな」

エズズ「そう、あっちこっちで、やっぱり外国人は嫌だな、やっぱり外国人にいくら優しい気持ちで接しても、こういう風に裏目に出るんだなって、悲しい事が起きると、一気に国民感情が排外主義者に変っちゃうので、そこが一番、迷惑しているんですね。だから、これは元を辿ると政治家のミスですよな」

水島「うん」

エズズ「政策的なミスであって、じゃあ、何故、反日教育を受けている地域から大勢、取るのか、何故、そこをブロックしないのか、親日国家の国と経済的に発展する、これから10年、20年かけて、両国間の経済協力を増やすっていうことであれば、その地域限定

で事前に現地で教育を行った上で、こっちに来た時には、もう、しっかりサポートした上で日本社会の一員にするか、もしくは期間限定的に5年とか10年だけに限定させて受け入れるかというような方法を考えないと、結局、元外国人と言え、じゃあ10年、20年、日本で生活しました。やっぱり本国に帰りますとなると、本国での10年、20年の空白が生まれる訳なので、その人達が無理矢理、帰された時に本国での居場所がなくなる訳ですよ。

じゃあ、せっかく日本のいい所を学んで、日本の社会の一員になれるっていうところに、無理矢理、帰っちゃうのも良くないと思うので、それは政策的に、この国と経済力を進めるっていうことであれば、計画的にやった方が良く、何処でもいいからということではないし、反日教育が行われている国からは、国家安全保障上は絶対に受け入れるべきではないと思います。

国籍を与える時も、反日教育を受けている地域、国からは絶対に受け入れるべきでは無い。結局、その国にはロイヤルティが無い。日本を愛していない、日本を敵視した上で、便利だから、パスポートだけが欲しいからっていうことで与えちゃうのは、結局、未来を考えると、国家に対して一番、脅威になってしまう原因を作ってしまうので、そこは未だ、日本政府の中で進んでいない法整備、その管理体制が進んでいないっていうか、やる人が居ないのか、だって歴史とかで見ると、イラン人を、あれだけ大勢、集めて国に帰しちゃった日本が居た訳ですよ。あの時は出来て、今は出来ないのは何故。やる人が居ない、やる政治家が居ないのか」

水島「うん」

エズズ「或いは、その政治の中枢部には、完全に別の儲かる人達が力を握っているか」

水島「うん。そうだね」

エズズ「そうだとしか思えないですね」

水島「そういうことだよ」

エズズ「はい」

石平「じゃあ、今、そういうことをおっしゃったように、反日国家、反日感情が強い国の人々を受け入れるのは慎重にならざるを得ないのは正に、その通りであって、一つが反日感情の強い国、具体的に言えば韓国もそうですし、もう一つ、私の出身国の中国。最近、中国は7月の下旬から連続3本の反日映画を放映するんですよ」

水島「うん」

石平「まず7月25日から南京事件を題材とした映画が放映されると。ああ～、中国国民があれを観たら、老若男女は一斉に興奮して、また新しい反日感情のクライマックスが出来たら、中国国内の映像では幼い女の子が映画を観て、それで母親の誘導ですね、誘導だね、どういう言葉を吐いたかとなると、やっぱり日本人を全部、殺してしまいたい。女の子ですよ。信じられますか。小さい女の子ですよ。泣きながら日本人を全部、殺してしまいたいという、いや、そういう国があるということです。更に、この国は共産党独裁の国であって…」

水島「そうなんだよ」

石平「その独裁政権が、未だ国民を洗脳しながらコントロールすることも出来るっていうね」

水島「そうだよね」

石平「そこがねえ…」

水島「もうね、ずうっとやっているからね」

石平「う～ん。そこの深刻さを、みんなは考えなければならない」

水島「全くその通りだね」

イリハム「教えた通り向こうは70年も、そういう教育をやって来た。まあ80年になりますけど」

水島「うん」

イリハム「こちらは全く逆の教育で、2000年以降、生まれた子供達は多分、自分の親が日本の文化を教えてくれない、教えてくれないじゃなくて、まず、その親が解らないから…」

一同「(苦笑)」

水島「そうだよね。それはその通りだ。うん」

イリハム「そうすると一方で向こうでは、こいつらを全部、殺すという教育の元で、こちらでは、人間はお互いに優しくすれば、それでオッケーという…」

石平「そうそう、そうそう」

イリハム「それで、ここに来たら、中国人は、みんな、優しいじゃないですか。どんな人間でも一人一人の時は優しい訳だよ」

水島「うん」

イリハム「でも周りに、自分に力になる集団が作られちゃったら、あの優しさは、もう無くなっちゃうんですよ。毎日、私達は町の中で、中国語が解る人間だったら、日本で生活しながら、しゃおるぶん、しゃおるぶんって、こう日本人って、それ、こう日本人って彼らが何をやったか分からない。まあ、店で物を買って出て来ても不満。何でもかんでも不満の毎日、でも、ここに帰化したい、ここに残りたい。矛盾な人間だと、今の新しい時代。

これから日本の国家を担う人間らが、彼らが無防備に、自分を守る心は無しに接触していく。そうしたら、この国はどうなる。それは、いつも私が言うのは、私じゃなくて私の子孫達には、もう一度、この国から何処かに亡命させたくないっていうことですよ」

水島「そうだよね」

イリハム「はい」

石平「今、その凄く切実な言葉ですよ」

水島「いや、よく解るね」

モーガン「エズズ先生が今、おっしゃった、その基準が非常にいいなあと思って、もし、反日教育をやっていたら、その国からの人々を一切、受け入れないことは当然だと、その基準はいいなあと思っていて、何故、自信が無くなったか、何故、先程のアミール君の写真があったんですけども、自分の国の政府がジェノサイドをやっている国に、武器を提供しているのかと思って、何が反日か、何が反人道的かって、もう一度、日本人らしく、この世界の情勢を見たタイミングが回って来たのではないかと考えていて…」

水島「そうだね」

モーガン「本当に日本人の為だけではなくて、アジアの為もそうですし、もう直面していると思います。これから西洋の道を歩み続けるか、日本の道を歩むかって、その選択に直面していると思っています」

水島「今、おっしゃったことはその通りでね、具体的な移民とか色々な話ですけど、台湾の問題で言うと、台湾の人に失礼かも分からないけどもね、いずれにせよ、中共に飲み込まれる可能性が非常に高いと思っている訳ですよ。その時、こんな国の支配下に置かれたくないと言って台湾の人が日本に亡命したいと大量の人が万単位で出て来た時、私は受け入れるべきだと思っているんですよ。でも、これが問われる。別に他の国に行きたい人が居れば色々居てもいいけど、取り敢えず日本は近いから。

そういうことがね、本当に我々は問われると思いますよ。人間として、さっき言ったように台湾っていうのは少なくとも今、議会と大統領が分かれているけれどもね、何かあって、まあねえ、前に知識人の国民党が来た時には大虐殺があったんだけど、こういうことでやられたら独立派とか、そういう人達は抹殺されると思いますよ。その時、ちゃんと、勇気を持ってね、少なくとも台湾は敵対的な国じゃない訳ですよ。

こういった人達を無理してでも受け入れること、或いは、かつて一時は日本国の中にあっただっていうね、こういう人達ということが本当に問われる。だから私は連帯とか何とか、運命共同体とか言う時にね、この時、どういう態度、中共がこうだからと慮って断るとかね、こういう人達は恐らく殺されますよ。こういうのを、そのまま見過ごすとかね、こういうのが本当にあるんでね。

さっき台湾の連帯なんて言う人達を、あまり信用できないって言ったのは、本当に具体的に問われると思う。これは亡命する人も多分、やっぱり結構、居るでしょう」

盧「まあ元々親日だからね。亡命じゃなくても普通に結構、みんな、老後は日本で過ごしたいとかって言う人も多いんですけど、ぶっちゃけ（笑）あまり日本人にとって申し訳ないですけど、自分が日本に今、長年、住んでいて、今後の10年、15年、20年の日本を見て来ると、せつかく台湾から亡命して来て、また日本から亡命するんじゃないかって、正直、思います」

水島「ああ、なるほど（笑）」

盧「何故かと言うと、私は、ずっと永山さんの番組でも、よく言っているんですけど、日本人自身が強くなれないと。私の周りの日本人って、特に会社とか、まあ、友達もいっぱい

い居るんですけど、みんな、あまり、物事を考えないです。例えば、映画一つ観に行くのも、何か観終わったあとに自分で何かを考える映画は、あまり人気が無いですよ（笑）」

水島「ああ、そうね」

盧「何か、もう、その場で笑って、はい、終了っていう、何かあまり頭を使いたくないものが好きらしいんですね」

水島「そうだね（笑）」

盧「何か、これも何だろう、今の日本の政治が、敢えて、こういう日本人をつくりあげて来たのか、態と、みんなに色んなことを考えさせない教育を敢えてさせてきたのか、それか、例えば、私は台湾ですけど、例えば、今回のリコールには正直、がっかりするんですけど、だけど希望があるんです」

水島「うん」

盧「みんなに対する希望。日本人って、あまりみんなに対する希望がなさそうですね」

水島「うんうん」

盧「何か、そういう何か、こう、自分の国の目標は何処にあるのか」

水島「うん」

盧「その国の為に、日本人の為に、自分の為に、じゃあ、みんなで手を繋いで、頑張って生きたいとか、最近、そういうのが、あまり見えて来ないっていうのもあるし、あとは、政府もそうですけど、私はITの開発をやっているんですけど、普通にお客さんが、あるいは会社で、どうしても、これをやらなきゃいけない。本来は、あまりお勧めしないんですけども、例えば、今の日本、外国人を受け入れるのが本当はやりたくないんだけど、やらなきゃいけない場合になったら、うちは開発やるにも、まず計画書を書きますよね。書いたあとにリスク・リストを出すんですよ」

水島「なるほどね」

盧「じゃあ、このリスクに対する改善策は何なのかと1個ずつ全部、書く訳ですね。で、それは1個ずつ潰して行って、じゃあ、それで最善の計画書はこれです。じゃあ、まず、テストをやって、そうやって、何か日本の政府って、あまり考える頭を持っていないから、その場で、取り敢えず、じゃあ、今、人が足りないから外から入れようよと」

水島「うん」

盧「でも入れるには色んなリスクがありますよね。それを、まず事前に知っておくこと。安易にその対策を実行するとかじゃなくて、実行するには凄く責任があるし、それは、どれぐらい日本の自分の国民に対して影響があるのか、まず、そこを考えるべきなのかなと思って、結局、何が大事かって言うと、教育じゃないのかなって、一番、元なのかなと思うんですよ。今の日本人の教育も、自分の国に対する生きがいを教えてないし…」

水島「うん」

盧「政府も、まあ、取り敢えず、今日は、これをやればいいや、みたいな（笑）。実は、会

社の中でもそうですし、自分の周りには、そういう考えの人が多いですよね」

水島「そうですよね」

盧「何かとっても残念だなと思って、やっぱり台湾人である自分の亡命先の日本（笑）であれば、もうちょっと誰かを攻撃するんじゃなくて、まず自分自身を強く、その強いっていうのは武器をいっぱい持つとか、そういうことではなくて、心の強さですよ。精神的な強さ。まず、そこをしっかりとって欲しいなあって、正直、思います」

水島「いや、ほんとに耳が痛い話でねえ」

盧「はい」

水島「その通りだと思いますね。ここへ来たら、また、ここでやられちゃうみたいなね」

盧「(笑)」

水島「そういう可能性は、はっきり言って、いっぱい、あるからねえ」

盧「はい」

水島「恥ずかしい話だけど『優しくって、ちょっと馬鹿』っていう小説が昔、あったのね（失笑）」

盧「うん」

水島「正に、悪い人じゃないけど、物を考えない馬鹿が沢山、増えたっていうね。昔の日本人は道徳とか規範があったから、勉強できるとか出来ないじゃなくても、仕事や色んなものに責任を持って、そういう道義や道徳がありましたからね。昔、蔡焜燦先生が『日本精神』と言っていたけど、日本の中には今、全く皆無ですから」

盧「はい」

水島「だから、そのところは言われて確かに、ちょっと辛かったねえ。無理して受け入れていたとしても、その中の日本人が、みんな、裏切ったりしてね」

盧「はい」

水島「逆に、そいつらを何だあって言ってね、やっちまえ～っていう風になる可能性だって本当にあるから、う～ん、まあ、本当に情けないけどね。解りました。昨今、大変、耳が痛い、中々辛い話だったけど（苦笑）」

盧「すみません（笑）」

水島「エルドリッチさん、お願いします」

エルドリッチ「はい有難うございます。ちょっと簡単なポイントだったんですけれども」

水島「はい」

エルドリッチ「モーガン先生は、エズズさんの非常にいい指摘について評価しておられましたけれども、即ち反日教育をしている国々から来られる人達の受け入れ制限とか禁止ということですけども、半分、冗談ですけども、半分、本気であるのは、モーガン先生と

私の出身の国」

モーガン「はい。その通りです」

エルドリッチ「アメリカから来る人達も制限しないといけないかもしれない。何故なら、残念ながら、やっぱり反日教育も長年、やっている」

モーガン「そうです」

エルドリッチ「それが自らやっている事もあれば、間接的に韓国、または中国の影響を受けて、されている自治体、或いは、その学者達。或いはメディアの人達も、残念ながら存在している、はい」

水島「その通りですね」

モーガン「私も本当にそう思ったんですよ。トランプが、この間、イランの空爆をして、広島・長崎と違って、よくやったということを書いて、そういうことを簡単に言える国、まあ、やっぱり反日の国だなあと思って、その国が今、日本を占領している事を私が見て、そいつらと協力している日本の政治家を見て、本当に腹が立ちます。何、これって。

昔の日本が命を懸けてアジアを解放したのに、今、本当に人間の屑だなあと思ったんで、日本の政治家が、あいつらと協力していると」

水島「うん」

モーガン「それをやっているんじゃないと思いました。さっき、盧さんがおっしゃった、次の亡命先を考えなければならないということまで…」

盧「はい」

モーガン「本当にこの1年間、台湾を巡る戦争のリアル感が増していて…」

水島「増しましたね」

モーガン「本当に日本から派遣する義勇団とか、日本の男が本当に立ち上がって、台湾の為にも日本の為、沖縄を守る為にも、日本の男は本当に深刻に考えなければならないと。それが日本の本当の独立をするチャンスにもなる訳ですけども、本当に棘の道を歩まなければならないと思う。

これから日本の独立が簡単なものじゃないなあと思って、そんな反日の国が未だに日本を占領していて80年間、原爆投下して良かったと思っている人、本当に、エルドリッチさんが今、おっしゃったことは重要だなあと思いました」

水島「そうですねえ」

モーガン「はい」

水島「そういう視点を失うとね、やっぱり間違えますね。今言ったように、我々の国自体の問題がまだまだ自覚されていない。モーガンさんが言っている事ですね。よく私はサファリパークの動物だと。サファリパークを管理している人は居るけど、自分達は独立したつもりで猿山の権力争いをやっているみたいだね。こういう状態の日本だっていう、それは本当に檻を破って出て行くこととか、こういうことって本当に決意も居るし、そういう

自分の独立とか誇りっていうものを取り戻すには、やはり戦いをしないと駄目ですよ。

私は今、言ったように本当に日本が『優しくてちょっと馬鹿』な人達、いやあ、盧さんに言われたのはその通りで、本当にそういう奴ばかりですよ。『今だけ、金だけ、自分だけ』みたいなね、もう、これ、悪くは無いです、悪い奴じゃないけどもそれだけで、所謂、虚無的になっていかニヒリズムみたいなのが浸透しているのか、それは西洋的なニヒリズムみたいなのは、さっき言った毎年3万人が自殺する国。それは伝統や文化っていうものを持っていないから、本当にそれです。そういうものがあるなら、そう簡単に死なないですよ。日本人は先祖も居るし子孫も居るっていうね、毎年、お墓にお参りするとかちやんと過去と自分の命は繋がっているっていう意識があったから。今は無いですから。だから、そういう状態になっているっていう事ですね。

石平さんが遅れて来たので言うと、最初に言ったのは、実は色々ある筋から、今年の北戴河会議のあと…」

石平「うんうん」

水島「中国が尖閣や台湾、台湾は特に完全包囲っていう封鎖とか、そういう色んな、特に尖閣にやって来る可能性が非常にあると」

石平「う～ん」

水島「だから今年は自衛隊の陸海空が秋にやる総合演習を全部、やめたんですよ。それから石垣や、ああいう所も、みんな避難訓練を今、本気でやっているって。やろうとしているということは結構、真面目に現実的な問題として、台湾や尖閣、八重山諸島に対する中国の行動が起きるかも分からないということがあってね、今、そういう意味で言うと先程、言った、こちらに大量に来ていて反日教育を受けた人達の問題とかね、これ、深刻なことで、国内のインフラを破壊したりとかね、色んなことが出来るじゃないですか。国民総動員法とかね…」

石平「国民動員法ね」

水島「動員法がある訳ですから、やらざるを得ない。家族が本土に居る時はね、ということを含めて、この問題をやっぱり国防安全保障や食糧の問題とかを含めて、本当にやって行かなきゃいけないっていうね。

石平さんは議員さんになったばかりだから別だけど、今日、皆さんが言ったことを自覚している、意識している政治家が本当に少ない」

石平「少ないです」

水島「ねえ。まあ、お付き合いもあったから解るでしょ」

石平「うん。解ります。だから、ある意味で、私が、どうしても選挙に立って政治の現場に入りたいと思った理由の一つがこれですよ」

水島「うんうん、うん」

石平「今迄、多くの日本の政治家が色々な場面で接触あって、正直、危機感が無さ過ぎます。あれは危機感以前の問題。そもそも、みんな、そういう問題に興味が無いんです」

水島「それ、さっき言った盧さんの世界でね。だから政治家もそうですよ」

石平「うん、そう。ほんとそもそも国を守るということに興味が無いんです。関心ない。簡単に言えば、選挙になると、票に繋がらないんですからね」

水島「だから、そういう視点だよ」

石平「そうそう、そうそう、そうそう、そうそう」

水島「まあ、こういう状態で聞くとねえ、もう（失笑）」

石平「危機意識以前の問題ですよ」

水島「視聴者の皆さんは相当、暗い気持ちになったか分かんないけど、ただ、こういうことを言ってくれる人達が居る。ね、まあ、石平さんは今度、議員になったってことだね、みんな、こういう希望を一つずつ紡いでいかなきゃいけないっていうかね、それから絶対に日本を諦めないという意識が無いと…」

石平「いや、ですから自分自身、自分が、これから6年間、勿論、スパイ防止法とか色々な政策課題をやるんですけども、ひとつ、自分なりの役割はね、要するに、国会の中で、毎日、誰か、国会議員の先輩でもいいから同僚でも捕まえて、5分間、時間を下さい」

水島「うん」

石平「じゃあ、中国は今、何を狙っているか、日本が危機的状態だぞということだね、食堂でもいいですから」

水島「そうだね」

石平「議員食堂のご飯を一緒に食べながらでも、そういう話をして積極的に発信していきたいんですわな」

水島「そうですね」

石平「うん」

水島「まあ、こういうことをねえ、一人一人がやるしかないんで、まあ、せっかくですから時間も段々近づいて来たんでね、提言みたいなもの、何が出来るか、何をすべきか、もうお話し下さっていますけども、もう一回、改めて日本の国民の在り方、それと、我々の国は前から言うように、縄文時代が原日本人になる訳ですけども、弥生は恐らく華中っていう、まあ、中国の上海とかあの辺の揚子江沿いの、長江沿いの所から来た人達が弥生として米とか技術を持ってね、縄文と弥生は混ざって日本民族っていうのを形成したって一般論としては言われている。他にも色々な所から来ています。

それこそウイグルから来てくれた人も居ればね、南アジア、或いはポリネシアとか色々な所から来た。混ざり合っているけど、殆ど出て行った人が居ないんです。これは、非常に面白い事で、民族大移動が無いんですよ。一部は勿論、ブラジルへ行ったり、タイへ行ったりした人も居ましたけど、ということは、まあ、よく言うんですけど、縄文時代が滅びそうになった時、日本全国、新潟から北海道まで疫病で三十数万人になったって言うんです。それで弥生が入って来てまた増えたんですけど、そうすると殆どみんなねえ、外国から入ってきた人は沢山、居るんだけど、みんな、何処かで繋がっている。

やっぱり、その感じが八紘一宇みたいなものを生んだんじゃないかということですけど、これが殆ど今、完全に空白の30年って言うのかなあ、プラザ合意から日本の資本主義が変わって本当に駄目になっちゃって来た。もう戦後の80年っていうのは、実は元の日本じゃないんじゃないかっていうね。

私が、このチャンネル桜を開いた時、あの小野田少尉というルバング島で、ずうっと長年やっていた、あの少尉が帰って来て帝国陸軍としての刀を返上して、何度もゲストに出て載って話して下さったんですが、彼がルバング島から戦後何十年も経ってから日本へ戻って来た時、日本へ戻って来たつもりだったんですよ。ところが戻ってみたら、もう日本じゃないって解っちゃった。これ、だかねら…」

石平「ああ、もう最早…」

水島「最早、自分が帰って来るべき祖国ではなくなっている」

石平「その時、日本では無いと」

水島「全然、違う。だから、彼は絶望して奥様と共にブラジルへ行って牧場を始めて苦労して、まあ、成功して、それで子供達を教育したいと言って、自然教室みたいなね、サバイバルで生きる方法とか、そういうことを為さってお亡くなりになっていたんですね。

モーガンさんがさっき言った戦後の日本の問題はね、やっぱり小野田さんはルバング島に居た生粋の軍人ですよ。情報将校だった訳で、こういう人達が戻って来た時に、自分が出撃、出征した時の日本じゃないっていうね。このことは本当に大きいと思っている訳ですね。こういうものを取り戻すにはどうしたらいいかって言うと、教育とか色々あると思うんですけどね。だから、逆に皆さんに提言を戴きたいなと。どうしたら本当に、もう一回、さっき言ったように、何も考えない、『優しいけど、ちょっと馬鹿』みたいな日本人から知性を少し取り戻す、道徳性を取り戻すっていうことが出来るかに関する提言を戴きたいなあと思うので、そうですね、今度は、逆にエルドリッチさんから、最後に色々お願い出来ますか」

エルドリッチ「分かりました」

水島「はい」

エルドリッチ「モーガンさんと似ていると思うけども、私は髪を剃っているので（笑）」

一同「（笑）」

エルドリッチ「はい。今日は非常に良い議論だったと思うので、正に今、社長がおっしゃっているように、私は、やっぱり提言という形に纏めて、また改めて、更に議論したらいいかなあと思う。私の提言の多くは、石平さんの宿題になります。彼が国会に行かれることになったので、いっぱい仕事をさせたいと思っています（笑）」

一同「（笑）」

水島「そうですね」

エルドリッチ「ましてエズズさんが提案した反日教育の国々からの人達の入国は、やっぱり厳しくすることが有効だと思っています。何故なら、他の国々も何かの外交的、政治

的、その国に対する嫌がらせとか批判的な発言、行動が当然、取り調べる対象になりますので、有効だという風に思っています。それが一つ。

二つ目ですけれども、自分の字がちょっと読めないんですけれども、えーと、入国する際、別に法律じゃなくてもいいんですけれども、行政指導としていいと思うのは、例えば、海外から来る場合、飛行機の中で最後の30分とかで色んな知らせがある。例えば入国する際、こういうことをしないとイケないとか、或いは、空港の案内とか色々あるんですけれども、私は、5分か10分ぐらい、日本の文化についての映像を各航空会社が上映すれば、外国人達は自分の行動が良くないとか悪いとか、ルール違反、法律違反とかマナー違反とかを、そういう風に少し考えさせられるものになるんじゃないかなあと思うので、そうすると摩擦とかトラブルが、もしかすると削減出来るかもしれない。

あと、今回、議論になっていなかった、今迄、殆ど誰も指摘していなかったんだけど、私が2~3年前、ある論文で書きましたのが、例えば大災害が起きた時の外国人達、冒頭で申し上げていた色んな種類の外国人達が居る訳ですけれども、その一つが観光で来る外国人達で、彼らも何をどうすればいいかが全く判らない場合があるので、この災害に於ける外国人対策について、もっと真剣に議論する必要があると思っています」

水島「はい」

エルドリッチ「何故、そう思うようになったかと言うと、ある時、東京から大阪に帰る時、新幹線に乗る前だったんですけれども、台風の影響で東京駅が大混雑だった。それで外国人達が今、どうなっているのか、さっぱり判らない。もし、これが、より大きな災害だったら大混乱になる。これを作業者が悪用したら大変だけれども、そこまでの話では無い、一般の観光者がどうすればいいか、やっぱり前もって何かの対策を講じたらいいと思っています。以上です」

水島「本当にその通りですね。目の見えない人とか、耳の聞こえない人とか障害を持った人達は、突然、電車が止まって動かなくなったら、何が、こう、耳が不自由な人は分からない。凄く不安になる。或いは途中で電車を乗り換えて下さいってアナウンスがあって、みんなが降り出すけど、えっ、なんで、ここで、みんなが消えるのとかね、そういう意味で、今言ったように外国の人も言葉とか、そういうものが無いとね、昨日、カムチャッカの地震がありましたけれども、本当に必要な事だと思いますね。私は、よく言いますが、障害の人達に便利と言うか、安心できる環境をつくるっていうのは、実は、外国人にも普通の人にも、別に普通って言うか障害を持たない人にも凄く親切になる訳ですね。

そういう世界ですから、是非、これはねえ、外国人や障害を持っている人達用にやると、一般の健常者と言われる人達も本当に安心できると思いますね。最近、不親切過ぎると思います。日本人の思いやりがないっていう感じがねえ、大変、良い提言だと思いますね。有難うございます。では、盧さん、お願いします」

盧「はい。エズズさんが言っていた通り、私も特に帰化される国を、ちゃんと選別して、反日の国プラス反日の国と仲良くなっている国とか（笑）子分とかね。弟分のあれも気をつけなきゃいけないのと、あと、そうですね、この在日外国人っていう一言で、色んな観点から、色んな目線で色んな議題は討論できると思うんですね。

私の中では、まあ、その受け入れる対策も必要だと思うし、あと日本人は自分自身、もうちょっと日本の誇り、日本人として誇りを持って欲しい。やっぱり、私が日本人だ、日本

人は最強っていうのを思っていないと、自分から外国人に色々教えることも出来ないと思いますし、プライドを持っていない人は、やっぱり、外国人と強く接触できないと思うんですね。まず日本は、ちゃんと日本人の誇りをもっていることを、まず教育から、もう戦後の亡霊から、もう、そろそろ（笑）」

水島「はい」

盧「もう、離れればいいんじゃないと思うんですよね。もう、ずっと憑依されたら人間は死んでしまうから、そこも歴史的にも何回も何回も謝っているし、そこから、もう一步、その抜け殻から脱出して、ちゃんと真の日本人として、真の日本の国を創って、そこから自分自身がちゃんとした人間じゃないと、外国人とどうこうって多分、出来ないと思うんですよ」

水島「うん」

盧「まず、そこから日本国内の日本人が自分自身からプラス、まあ、暫定な今の対策として、反日の国を制御するとか、まずこの二点から少しずつやっていけばいいんじゃないかなあと思います」

水島「はい。有難うございます。ではエズズさん、お願いします」

エズズ「今、日本の危機感から見ると一番、最も重要なこととしてやらなきゃいけないことが、いくつかありまして、まずスパイ防止法で、日本でスパイとして捕まった人は、必ず死刑を科さないといけないですね。あと日本で犯罪を起こした外国人に対しては、日本国内でちゃんと罰さないといけない。日本の主な法整備とか社会的インフラ、大変、重要な所に外国人を一切、入れない。水資源とか色んな所に近づけないようにして土地を買わせないっていう法整備が必要というのと、もう一つ、安楽死の導入が必要だと思います」

水島「うん…」

エズズ「あと、愛国教育と日本人でありながら売国行為をやった者には死刑、どの国でもあり得るんだけど、正に日本を狙っている国でもスパイ行為をしたら死刑に問われます。そういうことを今、急いでやらないと間に合わないと思いますので、いくつかのテーマは是非、早く進められた方がいいと思います」

水島「これは本当に、みんな、大事ですね。有難うございます。モーガンさん、お願いします」

モーガン「もしかしたらダイチン先生がお待ちになっていると思いますけど」

水島「ああ、ダイチンさんが。こっちで見たら、そうそう最後にしようと思っていたから、ごめんなさい」

モーガン「ああ、すみません」

水島「じゃあ、どうぞ」

モーガン「ああ、じゃあ、私の方から」

水島「はい、お話し下さい」

モーガン「ああ、はい。失礼します。日本が抱えている政治的な問題は、政治腐敗が構造的ですから、何処から攻めればいいのかと本当に分からなくなっちゃいますし、スパイ防止法は、私も、とても重要だと思いますが、米を追い出さない限りスパイ防止法は多分、出来ないでしょう。それが米が例外的になること、これが米にはスパイ・パラダイスですよ。

スノーデンが少しだけ開示してくれたんですけれども、日本の政治家も米が提供しているスパイ技術を使ってエックスキーストロークとかナーランドとか、そういったNSAとかが提供しているスパイ方法を日本の政治家も使っていて、スパイ防止法が一旦、出来ちゃったら、もう（失笑）それで内戦になってしまいます。米が何をやっているかと判ってしまう。スパイ防止法を作る前に、米を追い出さなければならないと思います」

水島「うん」

モーガン「それで色んな帰化する場では、日本国旗が置いていないことが凄くショックでした」

水島「うん」

モーガン「日本という国は存在しない。不在日本ということで、虚ろな殻になっちゃったこの日本。やっぱり魂が奪われたからだと思っていて、じゃあ、どうしようっていうと、靖国参拝が非常に重要だと思います。英霊に対して、本当に靖国参拝を形だけではなくて、本当に英霊に対して、今の日本で満足されていますかと本当に心の中で声をかけて、もし満足されていないという答が出たら、じゃあ、動きましょって、それが本当に重要だと思います。

自民党をぶっ壊しましょう。全員総逮捕して死刑に科した方がいいと思います。売国奴は、みんな、死刑だと思います。BRICSに勧誘するべきだと思います。先程のアミール君が味わっている痛み、日本人が、それを間接的にでも搾取されてきた国の立場から、世界を見ればいいと思います。

あとは荒谷卓（たかし）先生が米栽培をされていらっしゃると思いますが、そういうことが出来れば自然的に日本人だっていうアイデンティティが芽生えて来ると思います。私も含めて外国人が嫌なことをやったら厳しく叱って下さい。もし、嫌なことをやっていたら、その場で叱ってくれ。

私達は先程、失礼ですけれどもダイチン先生のお話を伺っていて、私はモンゴルが大好きで、世界史上最大の帝国を築いたモンゴルと日本人も、あとイスラムの方々も、我々アメリカ人が迷っているどころじゃないなあと、もっと可能性を大きく夢を見て何が出来るかと、ワシントンが動いているのを待っているんじゃないかと、我々が自ら何かをすればいいと私は思っています。

日本人の場合は、日本人になって載きたいです。日本人になってくれれば充分です。日本人は、日本人として動けばいいと思います。歴史を取り戻しましょう。本当のことを言しましょう。焚書の全作復刻版。それを、もう一度、出版して、アメリカ人とか、さっき冒頭で申し上げたニューヨークタイムズのフェイクヒストリーといった反日報道、それは当然なことを向こうがやっている。保守とか左翼とか、みんな、反日を行っている訳です。

嘘ですと、はっきり言って、先程、石平先生もおっしゃった中国の歴史も含めて、本当の

ことを言って、日本人が凄い事を行った。恥ずかしい事をしていないので、日本人が誇りを持って、もっと本当の歴史を取り戻してから再出発すればいいなと私は考えています。すみません、ちょっと雑談になっちゃったんですけども、そう考えています」

水島「いやいや、もう」

モーガン「以上です」

水島「有難うございます。丁度、ダイチンさんのモンゴルのね」

モーガン「はい」

水島「所謂、モンゴル帝国という、元というね」

モーガン「はい」

水島「ああいうものの在り方は、中国とか、ずうっと歴史の国とは、また違う世界帝国」

モーガン「はい」

水島「私が非常に興味を持っていたのは、それぞれの、何とかハン国ってオゴタイハン国とかチャガタイ・ハン国とか勝手にやらせているんですね」

モーガン「うん」

水島「全体で貢物と言うことさえ聞いていけば、全部、自由にさせている」

モーガン「うん」

水島「というようなね、こういう国の在り方とか世界とか、我々は国民国家意識しかないけども、実はそういう壮大な国の在り方そのものの、スケールの大きなものを持っていた。それにあやかりたかった義経伝説っていうのがあるんですね。義経は殺されないでモンゴルに渡って」

モーガン「はい」

水島「あのチンギスハンになったってね、それはモンゴル人にとっちゃ迷惑なんですよけども（苦笑）」

一同「(笑)」

水島「そういう感覚は、やっぱり、みんな、アジアの中に繋がりがあるという感じ、あれを我々も持っていて、私も小学校の時に読んだチンギスハン伝というね、これにワクワクしながら、勿論、義経じゃないですよ。そうじゃなくて、こういう人がアジアに居たというねえ、ああいうものを本当にみんなが知ることが大事だと思うので…」

モーガン「うん」

水島「せっかくだからダイチンさんに伺いましょう」

ダイチン「はいはい。いや、本当に長い時間、皆さんと、こういう討論番組に参加して、皆さんの色々な厳しい意見や期待、まあ、厳しい事を言っている自体で凄く期待している事ではないかなあと、私は感じております」

水島「そうですね」

ダイチン「特にモンゴル人と日本人っていうのは、本当に800年前って言うと1270年代から一応、モンゴル人と関係があったっていうことから考えると、本当に、もう長い何百年も前からのことですね」

水島「うん」

ダイチン「つい最近、天皇・皇后両陛下がモンゴルを訪問されて、モンゴルで大歓迎されたということ。モンゴル人の私が一番、印象深かったのは、実は1539年のノモンハン戦争、ノモンハン事件と日本人は言いますね。モンゴルと日本が戦った歴史もあった。中国とも日本は戦っているっていう色んなことがあった訳ですけど、中国の反日教育とは全く違って、モンゴルはそういう反日教育じゃなくて、その逆で、日本のやってくれたことに対して凄くプラス的にちゃんと考えて感謝しているっていうことは、今回の天皇・皇后両陛下のモンゴル訪問の時に『有難う日本』ってプラカードをモンゴル人が掲げていたっていうのが印象的でしたんですね。

実際、まあ、そうですね、日本の抑留者からも初めて日本、モンゴルで色んなことをやってくれたっていうこと。今、日本は経済的には世界中で凄く多大な貢献をしている。それは多分、何処の国でも、中国は色んな悪口を言っているけど、心の中では、思っている人も多いと思います。日本の貢献は大きい。ただ何を言いたいかというと、この日本は経済的に世界中で貢献していること、因みに人権っていうことを、ちゃんと言うべきではないか、滔々と言うべきではないかなと思います。

いつまでも日本は第二次世界大戦で悪い事を行った、だから謝らないといけないっていうことだけじゃなくて、今迄70年、80年間、ずっと世界で大きな貢献をしているっていうことも、ちゃんと言うべきですし、逆に中国に対しても今、石平先生も国会議員になったし、本当に国会の立場では、この中国に対して人権のことをちゃんと言うべきではないかなあと思いますね。

例えばモンゴルに対しても、ウイグルに対しても、チベットに対しても、或いは、香港人に対しても、この本当に残酷な人権弾圧だけではなくて、本当に民族自体を消そうとしている。そのやり方に対して本当に批判的な立場に立たないと、本当の意味での日本の魂っていうのは、そっちから探すべきではないかなと思いますね」

水島「なるほどね」

ダイチン「はい」

水島「はい。いやねえ、そういう感じ、こういうのを見ているとね、アジアの皆さんが、それぞれの各地からお出でになった方だから、やっぱり何か嬉しくなりますね、こういうことで話が日本についてもありますけど、移動する民っていうもののあり方とか人生の在り方っていうのがねえ、こう感じられて大変、感銘を受ける感じがします。では、イリハムさん、お願いします」

イリハム「はい。色々な提案をしたんですけど、まあ、やっぱりね、全ての事をやる為に、法治国家ですから」

水島「うん」

イリハム「ここに我が国会議員の石平先生もいらっしゃるってということで、まずは、先程、みなさんが提案した全てのことに對して、特別ルール、条律とかね、そういうものを創って、次は憲法を改正しない限り法律としては出来ないことが多いのですね。そして、昨日、フィリピンの外相がね、日本は、もう憲法九条を変える時期に来たんじゃないかっていう発言しているんですね。というのは、日本の憲法を修正する、それから日本も、それなりに自分なりの、自分の性格、文化を表す法律をつくる時期に来たっていう、世界はそれを望んでいるって話ですね。

ですから、全てのことは憲法から始まらないと、法律として成り立たないってところもあるし、勿論、日本を守る為に外国人に対する法律だけではなく、この文化を守らなかった日本人に對しても、ちゃんとしたルールを作らないといけないと思います」

水島「そうですねえ」

イリハム「その辺では石平先生に是非、お願い致します（笑）。以上です、はい」

水島「私もフィリピンには関わっていたから色々分かりますけど、あのフィリピンがそう言っているってことですよ」

イリハム「そうです。外相がね」

水島「はい、有難うございます。では、石平さん、お願いします」

石平「ああ、まあ、ある意味で今日から、或いは、明日からか、もう政治の現場に入るということになりまして」

水島「ああ、そうだね」

石平「ただ今迄の立場と全然、違いまして、今迄は言論人として言いたい放題、要するに提言する側」

水島「うん」

石平「今日はね、むしろ皆さまの提言を受けまして、じゃあ、政治の現場にどう下ろしていく、どういう風を実現させていくということで、ただ今、皆様から色んな課題を戴きまして、スパイ防止法の制定とか反日国家の大量移民をどうすべきかということと、あと日本人が日本人をどういう風に取り戻すかっていう教育の問題、憲法の改正、全ての課題が日本を立て直す為に、或いは、この日本という素晴らしい国を、我々の子孫の代々に渡していく為には、政治の現場では、もう待った無しです。それほどの大問題を政治で一つ一つクリアしていかなければ、日本は飲み込まれます。

あと、もう一つ、中国の脅威にどう対処するか。尖閣をどう守るか。最後が、やっぱり、今、イリハムさんがお話しされた憲法改正の問題。結局、憲法がちゃんとやらなければ、日本は法治国家ですので、憲法という土台をちゃんと作らねば、あとで色んな問題が必ず壁にぶつかるんです。ある意味ではね、私個人的な考えは、もう憲法改正というよりも、正に日本人自身による日本人の為の日本の憲法を一から作らなければならない」

水島「その通り」

石平「そこはね、日本の理想、日本の国体、日本の伝統、日本の文化が、それを魂として

入る憲法、今、日本国憲法は日本の魂が何一つも入っていない」

モーガン「そうですよ」

石平「そこを政治の現場で頑張りたいと思います」

水島「はい。素晴らしいですね」

石平「うん」

水島「いや、憲法改正なんか言ってたら本当に駄目ですよ。はい」

石平「そうです」

水島「おっしゃる通りでね、頑張っで戴きたいと。明日から臨時国会が始まりますから」

石平「そうですね、明日、初登院になっちゃうんですけど」

水島「我々も、いつも皆さんとやっていることですけど、天皇陛下のお出迎え、お見送りを国会前で行いますので、是非、集まって戴きたいと思います。お知らせがあれば、さっきの日の丸行進と。今年は何後80年、そして昭和100年という大変、大きな境目の年だと思ひます。石平さんには6年間、暴れて貰ってね、もう暴れて」

石平「ああ、暴れます。暴れます」

水島「暴れて、暴れ者石平と言われる（笑）」

一同「（笑）」

水島「そう言われるようにやっで貰いたひと思ひます。明日のお知らせです。明日13時から陛下のお出迎えを致します。お時間のある方は是非、お集まり下さい。

それから8月15日ですけど、もう20年間ずうっと続けていますけども終戦後80年、昭和100年、英霊に感謝し、靖国神社を敬う日の丸国民大行進、いつも沢山の方にお出で戴いて沈黙の中で歩きます。短い距離で1時間もかかりませんので是非、皆さん、お集り戴いて靖国神社の大鳥居まで、私達は歩きます。

本当に不思議なことですけど、大鳥居前に来ると何百という日の丸が一斉にはためきます。これには、みんな、ビックリします。靖国神社の向こうの社殿の方から、風が夏の暑い日でも必ず吹いて、一斉にバタバタバタァ〜ッと、はためくような感じになります。

そういう意味でも、今年は大東亜戦争に命を捧げられた皆さんへの感謝と尊崇の念、そして、あとに続きますとお誓ひする場でもございますので、それから15時からお出で戴ければと思ひます。その前に、もし、よろしかったら、毎年、昇殿参拝を行ってあります。集団で致しますので、もし、よろしかったら12時半集合ということでやっで下さい。

いよいよ本当に今年は何日本の領土が奪われる、或いはそういうような、日本の国家的な危機が来る時代が来てしまいました。無い事を望みますけど、いずれは来ます。いずれにしろ我々は今、心に決めて静かに断固として、絶対に日本の領土は譲らないという決意で、今、やっでいきたいと思ひます。本当に、今日は、皆さん、大変、いいお話を伺ったと思ひます。有難うございました」

一同「有難うございます（礼）」

***** お わ り *****